多賀城市文化財調査報告書第 135 集

多賀城市の近世社寺建築調査報告書

平成２９年３月

東北工業大学ライフデザイン学部
安全安心生活デザイン学科小山研究室

多賀城市教育委員会

多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

序　文

現在、多賀城市内には30を越す神社や仏閣が点在し、今も地域の人々によって祀られています。その多くは、江戸時代の中ごろ、仙台藩が作成した村ごとの要覧「風土記御用書出」にも記されており、長い歴史を有するものが少なくありません。

これらは、本市を構成する旧13か村のいずれかにあって、地域の人々の心のよりどころであったとともに、それぞれの地域の歴史を物語る重要な歴史資料でありますが、これまでほとんど学術的な調査はなされておらず、その実施が久しく待たれていたところでありました。

このたび、市内の神社仏閣12件13棟を対象とした建築学的調査が実現し、東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科小山祐司教授により、平成25年度から3年間、毎年10日程度の期間を設定して調査がなされました。現存する神社や仏閣の中には、修繕を加えられながら江戸時代の面影を残し、今日に至っているものがあります。それらは歴史的建造物として貴重な存在であり、建築学的調査研究は、地域の歴史に新たな一面を見出してくれるものと考えられます。

最後になりますが、今回の調査を担当していただいた小山祐司教授をはじめ学生の皆様、調査実施にあたり特別なご配慮を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げまして、序文といたします。

平成29年3月

多賀城市教育委員会
教育長　小畑　幸彦

例　言

1　本報告書は、「平成 28 年度　文化庁　文化遺産を活かした地域活性化事業」の採択を受けて作成したものである。
2　本報告書は、多賀城市教育委員会が主体となって、平成 26 ～ 28 年度に実施した市内の近世社寺建築にかかる調査成果をまとめたものである。報告書の執筆・編集作業は平成 28 年度に実施した。
3　建造物調査については、東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科小山祐司教授に依頼した。
4　本書は小山祐司教授が執筆し、本書中の図版については、「Ⅳ　棟札などの造営史料」に掲載したものを文化財課文化財係（当時）の鈴木孝行が作成し、それ以外を東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科で作成した。編集は文化財課調査普及係の早坂優子が行った。
5　「Ⅳ　棟札などの造営史料」の図版は、写真・図版内釈文で構成した。図版の縮尺は約 1/8 に統一し、図版内釈文では異体字を可能な限り実際の文字に近いもので示した。
6　調査に関する諸記録及び資料は、多賀城市教育委員会で保管している。

調 査 要 項

1　調査主体　　多賀城市教育委員会　教育長　小畑幸彦（平成 28 年 11 月 1 日より）
2　調査担当　　東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科小山研究室
　　多賀城市教育委員会文化財課
3　調査担当者
東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科教授小山祐司
　小山研究室　大学院生：佐藤諒（平成 27 ～ 28 年度）
　　学生：海野真帆、森恭子（平成 26 年度）
（公財）岩手県文化振興事業団　　所員　中村隼人（平成 26 年度）
多賀城市教育委員会文化財課文化財係　　千葉孝弥（平成 28 年度）
多賀城市教育委員会文化財課文化財係（当時）鈴木孝行（平成 26 ～ 27 年度）
多賀城市教育委員会文化財課調査普及係　　早坂優子（平成 28 年度）

＜資料整理、図面採録＞
東北工業大学大学安全安心生活デザイン学科学生
　　中平千歩、森渉斗、吉田知、平間匠（平成 26 年度）
　　高橋陽一郎、菅原崇智、土屋今日子（平成 28 年度）

目　次

Ⅰ　多賀城市近世社寺建築調査事業の概要 …… 1
1　調査目的 …… 1
2　調査方法と経過 …… 1

Ⅱ　多賀城市近世社寺建築調査の概要 …… 2
1　神社建築 …… 2
2　寺院仏堂建築 …… 3
3　旧宮城郡陸方域内の建築生産活動について …… 6
－多賀城市域の社寺建築の造営活動資料の分析を中心に－

Ⅲ　調査各説　－各村落ごとの神社仏閣－ …… 11
1　宮城郡陸方　八幡村 …… 11
(1)　八幡神社　拝殿（旧本殿） …… 11
(2)　喜太郎稲荷神社　本殿 …… 13
(3)　鎮守嶋観音堂 …… 15
2　宮城郡陸方　市川村 …… 17
(4)　陸奥総社宮　本殿（奥の院）・拝殿 …… 17
(5)　荒脛巾神社　本殿 …… 21
(6)　貴船神社　本殿 …… 22
(7)　K 家（旧佐藤家）氏神神社（大日霊神社）　社殿 …… 24
3　宮城郡陸方　笠神村 …… 27
(8)　仁和多利神社　本殿 …… 27
(9)　船塚観音堂 …… 29
4　宮城郡陸方　大代村 …… 30
(10) 柏木神社　護国神社　社殿　（旧柏木神社本殿） …… 30
5　宮城郡陸方　田中村 …… 32
(11) 志引観音堂 …… 32
6　宮城郡陸方　留ケ谷村 …… 35
(12) 太子堂 …… 35

Ⅳ　棟札などの造営史料 …… 37

Ⅰ　多賀城市近世社寺建築調査事業の概要

１　調査目的

宮城県内における、江戸時代に建立された神社、寺院等の建築遺構に関する調査は、昭和 57 年から 58 年に国庫事業として行われ、『宮城県の近世社寺建築』として報告された。更に宮城県によって平成２年から４年に実施された調査は、『宮城県の古建築』としても報告された。この二つの調査報告で当多賀城市域の近世社寺建築として報告されたのは、仙台城下から移築された旧感仙殿廟門、旧大年寺門（現　南宮　慈雲寺）のみであった。従って、江戸期に多賀城市域に建立された社寺建築に関する調査はこれまで行われていなかった。このため、平成 26 年度から３カ年にわたり市内の近世社寺建築について建築史的調査を行い、図面・写真などの基礎資料の収集を実施した。

２　調査方法と経過

多賀城市内に残る社寺建築遺構について、平成 26 年から平成 28 年度にかけて、事前調査を実施し、江戸期の遺構を抽出した。そして、12 件 13 棟を調査対象とし、調査を実施した。実施年度と調査対象棟は次の通りである。

平成 26 年度　八幡神社旧本殿（八幡）、喜太郎稲荷神社本殿（八幡）、
陸奥総社宮本殿、拝殿（市川）、荒脛巾神社本殿（市川）、
貴船神社本殿（市川）

平成 27 年度　鎮守嶋観音堂（八幡）、仁和多利神社本殿（笠神）、船塚観音堂（笠神）

平成 28 年度　K 家（旧佐藤家）氏神神社社殿（市川）、柏木神社旧本殿（大代）、
志引観音堂（東田中）、太子堂（留ヶ谷）

図１　調査対象分布図

Ⅱ　多賀城市近世社寺建築調査の概要

平成 26 年度から平成 28 年度までに建築史的視点で調査を行った近世社寺建築 12 件 13 棟についてその概要を述べる。全 13 棟のうち、神社建築が８件９棟であり、寺院仏堂建築は４件４棟であった（表１、表２参照）。本論では、先ず、神社建築、寺院仏堂建築の順に建築史的特徴を述べる。その後、建築装飾と建築工匠についても詳しく述べたい。

調査対象棟の具体的な内容については、調査各説で、各棟ごとに実測図と写真を添えて解説を行っているので参照されたい。

１　神社建築

神社建築８件９棟のうち、８棟が本殿建築であり、１棟が拝殿である。８棟の本殿建築のうち７棟が一間社流造、１棟が桁行き３間、梁行き２間の入母屋造である。拝殿建築は桁行き３間（実寸は４間）、梁行き３間の入母屋造であった。

妻飾りは虹梁大瓶束型式が７事例、豕扠首型式が２事例。向拝柱と入側部の繋ぎは、海老虹梁が５事例、水平な虹梁が２事例、手挟が２事例であった。中備については、仁和多利神社本殿の入側部分に詰組が用いられる他は、全ての向拝部、入側部が蟇股を用いている。

また、７棟の一間社流造本殿のうち、６棟が素木造であり、１棟が現在彩色を施されている。しかし、この１棟も彩色は近代以降の手によると看取される（10　柏木神社旧本殿）。一部細部意匠の渦紋に彩色を施しているものも見られるが、昭和期に手が入ったものであった（４　陸奥総社宮拝殿）。

細部意匠は、時代的な特徴の差異が見られた。江戸末期の遺構である八幡神社旧本殿の向拝部の木鼻や蟇股、手挟、入側の蟇股には立体彫刻が、入側の頭貫木鼻の透かし彫りが施されている。

また、江戸中期の遺構である貴船神社本殿やＫ家氏神神社社殿や仁和多利神社の水引虹梁木鼻は、立体木鼻であり、この時期の建築装飾の様式としては珍しい意匠である。

先に述べた建物及び、建物の部位以外は、平面的な繰り形に渦紋などが施された様式である。

表１　神社建築　調査対象一覧

番号	藩政期村落	建築名称		年号	西暦	建築形式	妻飾り	向拝部			頭貫木鼻	中備向拝	中備入側	備考
								繋ぎ虹梁	手挟	水引虹梁木鼻				
1	八幡村	八幡神社	拝殿（旧本殿）	江戸末期	19C半ば	入母屋造、銅板葺（元柿葺）	虹梁大瓶束	―	丸彫	立体二重龍と獅子	透かし彫り	立体蟇股	立体蟇股	
2	八幡村	喜太郎稲荷神社	本殿	寛延４年	1751	一間社流造、銅板葺	豕扠首	虹梁	－	平面	矩形繰形無	蟇股	蟇股	元の祭壇上部小壁
4	市川村	陸奥総社宮	本殿	貞享４～正徳６年	1687～1716	一間社流造、銅板葺（元柿葺）	虹梁大瓶束	海老虹梁	－	平面	平面	蟇股	蟇股	
			拝殿	享保19年	1734	入母屋造、銅板葺（元萱葺）	虹梁大瓶束	－	平面浮彫	立体獅子（昭和）	平面	蟇股（昭和）	蟇股	向拝は戦後改修
5	市川村	荒脛巾神社	本殿	江戸後期	18C後半	一間社流造、鉄板葺	豕扠首	虹梁	－	平面	無	蟇股	無	内部未調査
6	市川村	貴船神社	本殿	宝暦６年	1756	一間社流造、木羽葺	虹梁大瓶束	海老虹梁	－	立体象鼻	平面	蟇股	蟇股	
7	市川村	K家氏神神社	社殿	宝暦期	18C中頃	一間社流造、木羽葺	虹梁大瓶束	海老虹梁	－	立体象鼻	平面	蟇股	蟇股	
8	笠神村	仁和多利神社	本殿	江戸後期	18C後半	一間社流造、銅板葺（元木羽葺）	虹梁大瓶束	海老虹梁		立体象鼻	平面	蟇股	詰組	移築
10	大代村	柏木神社	旧本殿	江戸後期	18C後半	一間社流造、鉄板葺	虹梁大瓶束笈形付	海老虹梁		平面象鼻	平面	蟇股（後補）	蟇股	移築

２　寺院仏堂建築

寺院仏堂建築４件４棟全てが仏堂建築であり、３棟が観音堂で１棟が太子堂であった。本堂建築や庫裡建築は調査対象とはならなかった。仏堂建築は全てが一間堂建築であり、正面に向拝を付す方形造の形式であった。１間の寸法は２尺から３尺５寸程であり、太子堂以外は覆堂の中に納められている。入側部分の細部意匠は極めて簡略であり、中備は全てない。入側柱上部に斗栱を配置する形式は太子堂と船塚観音堂であり、鎮守嶋観音堂と志引観音堂は大斗で舟肘木を載せるのみの形状である。向拝柱上部の斗栱は志引観音堂では和様枠肘木を備える平三斗であるが、他の３棟は、皿斗を敷きその上に大斗を置く。船塚観音堂と太子堂では、この部分の枠肘木形状は禅宗様である。鎮守嶋観音堂では大斗が舟肘木を支えるのみの形状をしている。

表２　仏堂建築　調査対象棟一覧

番号	藩政期村落	建築名称		年号	西暦	建築形式	妻飾り	向拝部			頭貫木鼻	中備向拝	中備入側	備考
								繋ぎ虹梁	手挟	水引虹梁木鼻				
3	八幡村	鎮守嶋観音堂	本堂	江戸後期	18C後半	方形造木羽葺	－	海老虹梁	－	平面象鼻	省略矩形	蟇股	－	移築
9	笠神村	船塚観音堂	本堂	江戸後期	18C後半	方形造鉄板葺	－	－	平面	平面象鼻	平面	蟇股	－	移築
11	田中村	志引観音堂	本堂	江戸後期	18C後半	方形造鉄板葺	－	－	平面	平面象鼻	－	蟇股	－	
12	留ヶ谷村	太子堂	本堂	江戸末期～明治	１９C半ば	方形造鉄板葺	－	－	平面浮彫	立体象鼻	平面	－	－	

江戸末期　二重の虹梁
八幡神社旧本殿

宝暦６年　貴船神社

江戸後期　鎮守嶋観音堂

図２　向拝水引虹梁

江戸末期　八幡神社旧本殿

宝暦６年　貴船神社

宝暦期　Ｋ家氏神神社

江戸後期　仁和多利神社

図３　向拝虹梁　立体木鼻

貞享４～正徳６年　陸奥総社宮本殿

江戸後期　荒脛巾神社

江戸後期　鎮守嶋観音堂

江戸後期　喜太郎稲荷神社

図４　向拝虹梁　平面木鼻

江戸末期　八幡神社旧本殿

貞享４～正徳６年　陸奥総社宮本殿

江戸後期　仁和多利神社

宝暦６年　貴船神社

図５　入側頭貫木鼻

江戸末期　八幡神社旧本殿

寛延４年　喜太郎稲荷神社

貞享４～正徳６年　陸奥総社宮本殿

宝暦６年　貴船神社

図６　蟇股

江戸末期　虹梁大瓶束　八幡神社旧本殿

江戸後期　虹梁大瓶束笈形付　柏木神社旧本殿

江戸後期　豕扠首　荒脛巾神社

貞享４～正徳６年　虹梁大瓶束　陸奥総社宮本殿

図７　妻飾り

江戸後期　仁和多利神社

宝暦６年　貴船神社

図８　海老虹梁

江戸末期　八幡神社旧本殿

江戸末期　太子堂

図９　手挟

３　旧宮城郡陸方域内の建築生産活動について
ー多賀城市域の社寺建築の造営活動資料の分析を中心にー

これまで、仙台藩が造営主体となった建築生産活動に関する報告が多くなされてきたが（註１）、今回は多賀城市域近辺の村方・寺社および在所領主が主体となった建築生産活動について報告したい。本論では、今年度までの建築史的調査の過程で、新たに発見された藩政期の造営史料（特に棟札）を紹介しながら、多賀城市域近辺の建築生産活動の概容を考察してみたい（註２）。

(1) 多賀城市域近辺の藩政期における行政区について

多賀城市域は、藩政期においては宮城郡に属する 13 ヶ村から成る範囲である。宮城郡は、国分山根通り 19 ヶ村（旧宮城町・泉市など）、国分沖通り 14 ヶ村（現仙台市宮城野区・若林区など）、宮城陸方 30 ヶ村（仙台市宮城野区･多賀城市･利府町など）、宮城浜方 11 ヶ村（内塩竈村枝村８ヶ村、現塩竈市・七ヶ浜町）の４つの地域に分けられており、多賀城市域の 13 ヶ村は、宮城陸方に属していた。

図 10　江戸時代の行政区　宮城郡陸方村落と浜方村落の一部

（村名は多賀城市域 13 ヶ村、村名△は塩竈村枝村・端郷）

（2）藩政期における在方職人について（表３参照）

藩政期の村方における諸職人の支配は、先に述べた郡域やその中の複数の地域をまとめて行っていたと考えられる。時には郡を跨いだ領域を定めていた。農村部においては、作間稼ぎとして諸細工を営む者が多く、その場合、渡世願いを提出し藩から鑑札を与えられ、技能や営業規模に応じて役金を納めた。村々では、毎年諸職の役金をまとめた諸役帳が作成されており、それらにより、職人の分布などがわかることになるが、発見されている資料はまだ少ない（註３）。

表３　宮城郡陸方・浜方諸村における諸職人一覧（「安政三年　宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付諸書」による）

郡名	大肝入区	村名	大工	人数	屋根葺	人数	小羽屋根葺	人数	木挽	人数	壁塗	人数	畳指	人数	指物大工	人数	塗師	人数	合計人数	特記事項
宮城郡	宮城陸方	利府本郷	貞蔵/七兵衛/長吉	3	八兵衛	1													4	
宮城郡	宮城陸方	森郷	吉三郎/由松	2															2	
宮城郡	宮城陸方	春日村							喜助	1									1	
宮城郡	宮城陸方	澤乙村	養之助	1															1	
宮城郡	宮城陸方	菅谷村	七三郎	1					喜右衛門	1									2	
宮城郡	宮城陸方	神谷澤村			重吉	1			平右衛門	1									2	
宮城郡	宮城陸方	岩切村	運蔵	1	七五郎	1			圓蔵	1									3	
宮城郡	宮城陸方	余目	長吉/清七	2	久松	1							利三郎	1					4	岩切村端郷
宮城郡	宮城陸方	今市	清吉/平蔵/千代松	3	權七	1							長兵衛	1	三平	1			6	岩切村端郷
宮城郡	宮城陸方	田子村	長之助	1	卯吉	1			長右衛門	1									3	
宮城郡	宮城陸方	岡田村							平七	1									1	
宮城郡	宮城陸方	新浜	正蔵	1					平三郎	1									2	岡田村端郷
宮城郡	宮城陸方	蒲生村	嘉左衛門/久七/久左衛門/義右衛門	4	作之永	1													5	
宮城郡	宮城陸方	福室村	栄治/甚太郎	2	千代松	1			萬蔵/重蔵	2									5	
宮城郡	宮城陸方	新田村	長之助	1															1	
宮城郡	宮城陸方	山王村			久助	1			長蔵	1									2	
宮城郡	宮城陸方	南宮村	丈助/久太郎	2	萬助	1													3	
宮城郡	宮城陸方	市川村	栄治/才三郎	2															2	
宮城郡	宮城陸方	高橋村	松蔵	1															1	
宮城郡	宮城陸方	田中村							清六	1									1	
宮城郡	宮城陸方	中野村	太吉/徳三郎	2	惣助/与兵衛	2			吉之助	1	忠太郎/次三郎/次郎吉	3							8	
宮城郡	宮城陸方	八幡村	長田利右衛門/今野要八郎/太蔵	3	幡治/權十郎/善吉	3													6	
宮城郡	宮城陸方	大代村							儀助	1									1	
宮城郡	宮城浜方	湊浜	兵助	1															1	塩釜村枝村
宮城郡	宮城浜方	松ヶ浜村	太兵衛	1															1	塩釜村枝村
宮城郡	宮城浜方	花渕村	長太郎	1															1	塩釜村枝村
宮城郡	宮城浜方	東宮浜村	俊治	1															1	塩釜村枝村
宮城郡	宮城浜方	桂島村	利惣治	1															1	
宮城郡	宮城浜方	代ヶ崎浜村									豊治	1							1	塩釜村枝村
宮城郡	宮城陸方	留ヶ谷村			重三郎	1													1	
宮城郡	宮城陸方	浮島村	善三郎	1															1	
宮城郡	宮城浜方	塩釜村	善助/幸左衛門/喜兵衛/清七/専太郎/源吉/權吉	7	平右衛門/萬蔵/善四郎	3	定吉/喜太郎	2	惣右衛門/長右衛門/圓蔵	3	勘七/七蔵	2	甚七/助蔵/勘四郎/文蔵	4			齋藤八郎右衛門/五郎兵衛/栄作/東助	4	25	棟梁平治と末尾に記載。塩釜村であるか不明
				45		19		2		16		6		6		1		4	99	

それぞれの領域は、大工の中から１名選び、「諸職人棟梁」とし、その地域の職人の制道を任されていた（註４）。藩政の制度としては、宝暦 13 年（1763）に定まったとされている。多賀城市域の 13 ヶ村に関しては、「安政三年　宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」（註５）によると、宮城陸方 22 ヶ村と岩切村端郷２ヶ村、岡田村端郷１ヶ村、宮城浜方２ヶ村と塩竈村枝村５ヶ村の合計 32 ヶ村と一緒に支配されていた。但し、諸職人棟梁の記述は見当たらない。また、この史料は所謂諸役帳ではなく、藩から下達された家作などに関する倹約令に対応した、関係する諸職人と検断、肝入が遵守することを誓約した文書（請け書）である。

同史料によると、大工 45 人、屋根葺 19 人、小羽屋根葺２人、木挽 16 人、壁塗６人、畳指６人、塗師４人の合計 99 名。村落ごとにみると、塩竈村の 25 人を筆頭に、中野村８人、八幡村６人、岩切村端郷今市６人などとに分布している。

⑶ 造営記録に見える建築工匠の所属（表４・５参照）

①陸奥総社宮造営史料について

「奏者明神宮」関係資料が５件と、合祀された「大日堂」関係史料が１件の計６件。修理造営史料が３件、建立造営史料が３件。総社宮の造営主体は願主として別当寺神奏院が記され、惣奉加などとして「仙臺惣町中并御分領中」とある。大日堂では、願主として別当寺光徳院、そして「高橋村氏子中」などと記されている。全て、社寺と氏子である村人・仙臺町人が主体となった造営活動であると考えられる。史料に記される建築工匠のうち、居住村などが判明する工匠について記す。

正徳６年（1716）棟札に記される「大工棟梁　堀川加平次廣次」は仙台市泉区七北田の洞雲寺の延享２年（1745）棟札に記される「仙臺元材木町頭領匠　堀川住右衛門廣次」と考えられる。また、享保 19 年（1734）棟札に記される「大工棟梁加藤權七郎勝治」は、寺池領主である、登米伊達氏の仙臺屋敷表門造営に関わる宝暦８年（1758）の史料に記される「仙台城下新伝馬町大工棟梁加藤權七」と考えられる。また、安政４年（1857）の大日堂修復棟札に記される「大工　松蔵」は、「安政三年　宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」の高橋村の工に記される大工松蔵と考えられる。総社宮の貞享４年（1687）棟札の「大工内藤長右衛門吉久」は、仙台藩御大工の「内藤氏」との関連が想像される。さらに、元禄 14 年（1701）棟札の「工匠鈴木庄内重長」は、洞雲寺棟札に記される「塩竈町大工棟梁　鈴木喜惣右衛門永春」との関連が強く考えられる。

②喜太郎稲荷神社造営史料について

八幡宮（内八幡宮）関係史料が５件と喜太郎稲荷神社関係史料が５件の計 10 件。建立造営史料が２件、修理造営史料が６件、造営内容不明史料が２件。喜太郎稲荷神社と八幡宮は八幡在所領主である天童氏と関わり合いが深い神社である。両社造営の願主として天童氏当主が記されていることから、地頭が造営活動の主体となったと考えられる。

寛延４年（1751）喜太郎稲荷神社の建立造営棟札の「大工　仙臺新伝馬町　勘四郎」は仙台城下の町大工であり、「木挽　宮城松ヶ浜　喜惣兵衛」は塩竈村枝村の松ヶ浜の村工匠である。八幡宮の文政 11 年（1828）、天保７年（1836）の屋根替造営棟札に記される「屋根葺棟梁　佐々木幡治道明」は、「安政三年　宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」の八幡村屋根葺の「幡治」に当たると考えられる。八幡宮の安政３年（1774）屋根替造営棟札の「善吉」は八幡村屋根葺の「善吉」と考えられる。また、八幡宮の寛文９年（1669）の建立造営棟札に記される「大工　伊藤久左衛門」と「伊藤善兵衛」の伊藤姓は、洞雲寺明和９年（1772）棟札の「宮城郡八幡村　同（大工）　伊藤清之助」の伊藤氏との関連が考えられる。

表４　多賀城市域近世造営史料

	年号	件名	建造物	造営対象名	造営種類	願主・壇越	御大工棟梁など	小工・脇棟梁など	建築工匠	出典
陸奥総社宮	貞享４年 1687	陸奥総社宮 多賀城市市川	鹽竈宮末社 奏者明神宮	一宇 （神殿・拝殿）	再興	別当神奏院宥仙 惣奉加 仙臺中貴賤 并宮城中衆	大工　内藤長右衛門吉久 大工　内藤長吉良定		木挽　庄司甚十郎春時 塗師　小川徳兵衛	棟札
	元禄14年 1701	陸奥総社宮 多賀城市市川	奏者明神宮	神祠一基	修理	社家 志賀筑後守家次	工匠　鈴木庄内重長 工匠　安部丈左衛門時成		木挽　佐藤長助春久	棟札
	正徳６年 1716	陸奥総社宮 多賀城市市川	奏者明神社	（神殿・拝殿）	造営	別当神奏院有應 捨資勤力檀誰 仙臺惣町中 并御分領中	大工棟梁　堀川加平次廣次		木挽　濱田権兵衛 木挽　佐藤勘三郎	棟札
	享保19年 1734	陸奥総社宮 多賀城市市川	鹽竈宮末社 奏者明神宮	拝殿一宇	造営	別当神奏院鏡光 惣奉加 仙臺惣町中 并御分領中	大工棟梁　加藤權七郎勝治	大工脇棟梁 熊谷伊兵衛勝久	木挽　小松長兵衛勝昌 冶工　佐藤小平次	棟札
	慶應３年 1867	陸奥総社宮 多賀城市市川	（奏者明神宮）	本殿	屋根替	不明	棟梁　加藤熊右衛門		伊藤善治 後藤□吉 菅井権□ 加藤幸右衛門	造営札 （裏未確認）
	安政４年 1857	陸奥総社宮 多賀城市市川	大日堂 多賀城市高橋	奥殿	修復	別当光徳院 高橋村氏子中	大工　松蔵 亀代治			棟札
喜太郎稲荷神社	寛文９年 1669	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	八幡宮	一宇	造立	天童定義	大工　伊藤久左衛門	大江六衛門 伊藤善兵衛 滝口源左衛門	木挽　宇平次	八幡宮棟札
	文政11年 1828	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	八幡宮		屋根替	別当光徳院	記載無し	記載無し	記載無し	八幡宮棟札
	天保７年 1836	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	八幡宮		屋根替	天童頼益			屋根葺棟梁 佐々木幡治道明	八幡宮棟札
	弘化３年 1846	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	八幡宮	一宇	屋根替	天童頼益 施主 惣一家中			屋根葺棟梁 佐々木幡治道明	八幡宮棟札
	安政３年 1856	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	八幡宮		屋根替	天童頼宣			棟梁　三橋徳右衛門 佐々木勘右衛門 善吉 茂平	八幡宮棟札
	寛延４年 1751	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	喜太郎宮	一宇	建立	天童頼根	大工 仙臺新傳馬町　勘四郎		木挽　宮城松ヶ浜 喜惣兵衛	喜太郎神社棟札
	宝暦９年 1759	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	正一位 喜太郎稲荷社		造営？	不明	不明	不明	不明	喜太郎神社棟札
	文政11年 1828	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	喜太郎宮		造立	天童頼益	記載無し	記載無し	記載無し	喜太郎神社棟札
	天保13年 1842	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	正一位 喜太郎稲荷社	一宇	屋根替	天童頼益	記載無し	記載無し	記載無し	喜太郎神社棟札
	安政３年 1856	喜太郎稲荷神社 多賀城市八幡	喜太郎宮		屋根替	天童頼宣			棟梁？　西村屋栄吉 舛屋信治 同　新蔵 同　新助	喜太郎神社棟札
貴船神社	宝暦６年 1756	貴船神社 多賀城市市川	白山権現宮	一宇	造営	施主 市川村金山屋敷 菊地七兵衛	大工棟梁 鹽竈住喜惣次永春	宮大工　勘兵衛 與四郎 喜傳次	木挽　宇平次	貴船神社棟札
仁和多利神社	元禄13年 1700	仁和多利神社 多賀城市笠神	仁和田里權現宮	一宇	建立	不明	宮城郡八幡村 大工伏谷作左衛門		宮城郡円山住 木挽　成澤五郎七	仁和多利神社棟札
	元文４年 1739	仁和多利神社 多賀城市笠神	仁和田里權現宮	鳥居共	奉建	不明	大工　太郎兵衛			元禄棟札の裏面 複数の時代の墨書
	宝永カ	仁和多利神社 多賀城市笠神	不明	不明	不明	不明	大工　筒カ野慶内			元禄棟札の裏面 複数の時代の墨書

表５　関連する造営史料（七北田洞雲寺、登米伊達氏仙臺屋敷）

	年号	建築名称				願主・壇越	大工・御大工・大工棟梁など	小工・脇棟梁など	建築工匠	出典
洞雲寺	延享２年 1745	洞雲寺 仙台市泉区七北田	洞雲寺	宝殿	建立	洞雲寺	住仙臺元材木町統領匠工堀川住右衛門廣次		石工　奥右衛門 木挽　六之丞 畳師　三平	棟札写
	明和９年 1772	洞雲寺 仙台市泉区七北田	洞雲寺	不明	建立	洞雲寺	宮城郡鹽竈町大工棟梁　受主 （仙臺本材木町大工　堀川住右衛門） （國分七北田町同　　土井喜左衛門） 両人弟子　鈴木喜惣右衛門永春	主立　鈴木喜四郎 國分七北田町脇棟梁　大野喜惣兵衛 柴田郡支倉村　彫工　佐藤和右衛門伊立 同　郡小野村　大工　菅原又四郎 深谷郡上下堤村　同　畑中太郎七 宮城郡八幡村　同　伊藤清之助 仙臺川小屋坂　同　佐々木利助 松島　市郎右衛門 喜惣右衛門弟子　惣兵衛 同　惣八以下10名	鍛冶　鈴木徳助 釘屋　長十郎 木挽棟梁　兵蔵 脇木挽　助七 本山　惣助 同　勘右衛門 石工　市之助 人足肝入　喜助 人足肝入　源右衛門 普請主立　野村屋仲四郎 同　櫻井屋圓之助 賄方世話人近江屋留兵衛 沼田屋三九郎	棟札写
	天明元年 1781	洞雲寺 仙台市泉区七北田	洞雲寺	山門	建立	洞雲寺	宮城郡國分諸職人棟梁 堀川住右衛門　土屋喜左衛門 鹽竈町 両人弟子鈴木喜惣右衛門永春	脇棟梁　大野屋喜惣兵衛 喜四郎 伊藤清太郎 西沢屋市郎左衛門 長八 丈助 長吉 惣八以下10名	御鍛冶　茂兵衛 木挽棟梁　兵蔵 友右衛門 久内 石工　奥右衛門 七郎兵衛 彫刻師　和七 清三郎 清之助 屋根師棟梁　賀太平以下6名	棟札写
登米伊達氏	宝暦８年 1758	登米伊達氏	仙台御屋敷	表門	建立	寺池要害 地頭	新伝馬町大工棟梁　加藤權七 同棟梁　勝治	脇棟梁　庄子平三郎 同　佐藤五兵エ 主立　佐藤仁四郎 同北八番町　羽畑佐治兵エ以下3名 並大工　十文字庄八以下13人 町大工　肴町　門四郎 新伝馬町　太十郎 石巻　市郎兵衛以下7名	御小屋役　兵太夫以下8名	登米藩史稿

③貴船神社造営史料について

白山権現宮（現貴船神社）の造営史料は宝暦６年（1756）建立造営棟札１枚のみ。施主として「市川村金山屋敷　菊地七兵衛」とあり、有力農民が自ら造営活動の主体となっている。

棟札に記される「大工棟梁　鹽竈住　喜惣右次永春」は洞雲寺の明和９年・天明元年（1781）棟札に見える「宮城郡鹽竈町大工棟梁　鈴木喜惣衛門永春」と考えられる。鈴木喜惣右衛門永春は陸奥総社宮の正徳６年建立造営棟札に記される「大工棟梁堀川嘉平次廣次」の弟子であったこともわかる。

④仁和多利神社造営史料について

仁和田里權現宮（現仁和多利神社）の藩政期における造営史料は 1 枚残るが､元禄 13 年（1700）の本殿建立棟札裏面に追記される形で元文 4 年（1739）の「鳥居共」の建立と年紀や造営内容が不明である記事が記されている。表面には壇越や願主などの項目は記されず､「宮城郡笠神村肝煎本江氏　九郎右衛門　奈右衛門」や御百姓の名前が 27 名列記されている。

元禄期の造営は同社の氏子である笠神村御百姓らが造営活動の主体であると考えられる。表面には「同郡（宮城郡）八幡村大工伏谷作左衞門」と「同郡（宮城郡）円山住木挽成澤五郎七」が列記されている。大工は八幡村、木挽は笠神村円山に居住していた。

⑷ 造営主体と建築工匠の動員について

今回は、多賀城市域の社寺建築に関わる造営史料を中心に考察を行っている。限られた域内ではあるが、在所領主が主体となった建築造営活動と村百姓と寺社が主体となった造営活動の実体の一部が確認された。いずれも、郡内、就中、広域領域「宮城郡陸方・浜方」内の建築工匠の動員が複数確認された。社寺の規模によっては「仙臺惣町」や「御分領中」の援助を受けた造営活動が行われており､「領域外」である仙臺町大工を棟梁として招いている。

本来は仙台藩領域全体、もしくは、郡域など広範囲に及ぶ考察が必須であるが、今後の課題としたい。

註

(1)　a 小山祐司「江戸時代末期における仙台藩御大工と御大工大工組について－千田家文書を中心として－」1993 年、東北工業大学大学紀要 1 ：理工学編　第 13 号

b 小山祐司「仙台藩々営作事における工匠動員形態について－御修覆を中心として－」2000 年、日本建築学会東北支部研究報告集第 63 号

c 小山祐司「登米伊達氏の建築生産組織について－仙台領の城・要害における建築生産組織について－」2011 年、日本建築学会東北支部研究報告集計画系第 73 号

(2) 小山祐司他「多賀城市内の近世神社建築遺構について」2015 年、日本建築学会東北支部研究報告集計画系第 78 号

(3)「宮城県の諸職」1990 年、東北歴史資料館資料集 27

(4) 佐々木常人「仙台藩における諸職人棟梁について」1988 年、東北歴史資料館研究　　紀要第 14 巻

(5) 多賀城市史　第 5 巻　歴史史料（二）所収

Ⅲ　調査各説　ー各村落ごとの神社仏閣ー

１　宮城郡陸方　八幡村

⑴ 八幡神社拝殿（旧本殿）（多賀城市宮内１－２－50）

神社参道が東西に走り、その北側のほとんど起伏のない平坦な地に神社境内が設けられている。東日本大震災による地震と津波被害を受け、社殿以外は倒壊・流失の被害を受けた。境内の森もほとんど伐採され、往年の鎮守の森の面影はない。しかしながら、境内の諸施設は、徐々に復旧再建されつつある。

当該八幡神社は、創建は延暦年中とされ、古館と呼ばれる現在の市内八幡の末の松山付近にあった。その後、建保年中に現在の地、宮内に遷宮された。太平洋戦争末期の昭和 18 年頃、海軍工廠建設に伴い、八幡字窪地内に御神体のみ移した。戦後になり再び、ここ旧地に戻る。移転の経緯は不詳である。

現社殿は、本殿、幣殿、拝殿が連結した形状であり、南面して建つ。本殿と幣殿部分はかなり新しい建物であり、昭和 35 年に増築されたものと考えられる（境内碑伝）。従って、現在の拝殿の建物が元来の「本殿」である。

安永３年（1774）９月宮城郡陸方八幡村仮肝入栄吉が記した『八幡村　風土記御用書出』（宮城県史所収）には、

「 一、村鎮守　一、八幡社　当所ニ而ハ沖八幡と申唱候事　一、小名　宮内　（中略）
一、社地　竪八拾弐間　横百間　　一、社　南向三間作
一、鐘楼　竪壱間　横壱間　（中略）　一、鳥居　南向
一、長床　竪五間半　横弐間　（中略）　一、別当　当村　真言宗末松山磐（ママ）若寺
（以下略）」とある。

「南向三間作」の記事は、現状の拝殿の規模と同一と考えられるが、建築細部意匠は、安永期よりも降る様式で新しい。

安永期以前の社殿規模を記す資料として、明治 40 年（1907）の『神社由緒調』の「宮城郡多賀城村八幡明月壇　郷社　八幡神社」項目の「別当般若寺ノ條ニ（前略）藤塚氏ノ古記録ニ曰ク（中略）奉造立八幡宮社萱葺三間二面御宝殿　（中略）長禄三　大才　巳卯　八月十三日（後略）」と棟札と思われる記録が記されている。当時の建物規模を示す間面記法による記述と考えると茅葺の梁行２間で桁行き３間に、前後に庇を付した建物であると考えられる。このとき、前後の庇とは、背後に約一間四方の突出を付し、御本尊・御神体を安置し、前には向拝を付したとも考えられる。

また、同文書には、明治期の境内や建物規模の記述や境内図が記載されている。境内図の拝殿には、梁行方向に「二間一尺」、桁行方向に「三間二尺」、背後の突出部分に幅「七尺」、奥行「七尺五寸」添え書きが施されている。この数値は今回の実測調査で得られた数値と近似している。

更に参道には西向きの石造鳥居と南向きの木造鳥居が描かれている。また記述には「社殿　神殿附戸造リ屋根ハ柿葺彫刻ナシ長禄（ママ）三年十三日改造後文政七年安政三年明治三十九年修覆ス坪数弐坪拝殿母屋造屋根柿葺彫刻蛙又ハ龍桁梁雲龍獅鶴ニ松籠刻舛組ハ出組彩色ナシ坪数七坪二合　神饌所二坪五合　　参集所　三坪七合五夕　　長床　十三坪七合五夕　　社務所　十三坪七合五夕」

これらを見ると、古くから「本殿」は、現拝殿の規模と同じと考えられ、屋根葺き材が茅葺から柿葺そして、現在の銅板葺に替わったことがわかる。

次に現状の拝殿の実測調査を基に、建築史および意匠の面から所見を述べたい。

拝殿の平面形状は、桁行き３間、梁行き２間で、実寸は、正面と背面の中央の間が７尺７寸５分、その他の柱間は約６尺３寸と考えられる。三方に切り目縁を施し、擬宝珠高欄を設ける。脇障子を左右に配置する。正面中央に向拝部を付し、木階段を設ける。

屋根は、入母屋銅板葺であり、妻飾りは虹梁大瓶束。懸魚は、東西の妻とも現在欠落している。

柱は直径約８寸の円柱であり、正面の４本は欅材である。壁は、横嵌め板壁であり、頭貫、内法長押、地覆長押で軸組を固める。

組み物は二手先で、軒支輪はレリーフを施した板支輪である。二軒で繁垂木。中備は透かし蟇股に雲紋や水紋などの立体彫刻を施すが、背面だけは平面的な透かし蟇股。これら蟇股は、外部にだけ施され、板壁の小壁を挟んだ内部にはない。即ち、本来の構造材ではなく、装飾材である。

正面の両脇の間は格子戸､中央の間は両折の桟唐戸とガラス戸が二重に設けられている。正面に、１間の向拝を設けるが、拝殿入側柱列との繋ぎ梁はなく、立体彫刻の手挟を向拝柱上部組物に架すのみ。

この向拝水引虹梁は、二重に虹梁が架され、下段の木鼻は獅子頭、上段の木鼻は龍頭であり、それぞれ、立体彫刻。上下の虹梁の間には龍彫刻が、そして上部の虹梁上には、現在一部欠落しているが立体彫刻を施した蟇股が置かれる。

内部は、東西の柱列により南北に二分されているが、内部仕切りの建具は設けられない。奥の間中央から幣殿に降り本殿に至る。この中央間の丸柱には板壁の痕跡はない。前後の部屋ともに、床は畳敷き、天井は棹縁天井であり、中央の柱列の真中の間には虹梁が架される。さらに、柱上部には頭貫、更に台輪が施されている。その上部に中備として３間とも透かし蟇股を付すが、板壁の小壁裏側には施されていない。

現在の拝殿は、元々は、背面中央に１間ほどの突出部を持った本殿建築である。また、建築細部意匠の様式は、江戸末期の非常に優れた立体彫刻を施した意匠であると看取される。江戸後期安永期の文書の規模形状に合致するが、現在の拝殿を特徴づける建築意匠は、それより降った幕末期の建物であると考えられる。

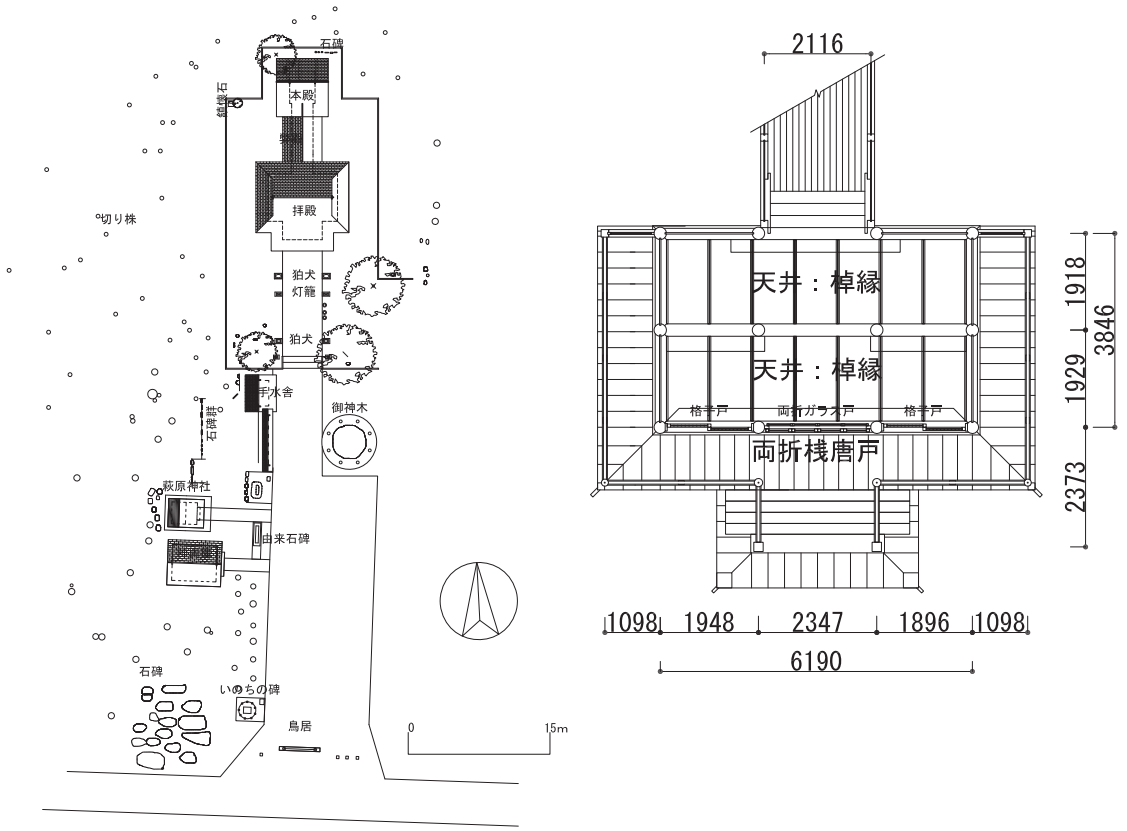


図 11　八幡神社　配置図・平面図

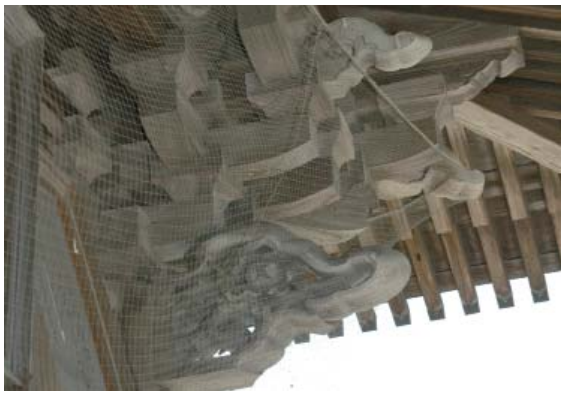
拝殿（旧本殿）正面外観

拝殿（旧本殿）・幣殿・本殿　側面外観

拝殿（旧本殿）妻飾り　虹梁大瓶束

拝殿（旧本殿）向拝部意匠
立体木鼻　二重水引虹梁

拝殿（旧本殿）　向拝部　立体手挟



拝殿（旧本殿）入側隅意匠
頭貫木鼻　二手先斗栱　板支輪

⑵ 喜太郎稲荷神社本殿（多賀城市八幡２－７）

旧八幡城下の東西の通りの不磯寺脇の小路を北方へ登った丘陵に現在の社地がある。もともとは、八幡村の天童氏（準一家、知行 134 貫 767 文、在所拝領）城下の丘陵部「臺」に喜太郎稲荷神社と八幡宮（内八幡）社地が隣り合ってあった。 社殿は喜太郎稲荷神社本殿のみ現存する。但し、本殿内部の奥に二室の祭殿が設けられており、向かって左（南側）に八幡宮の扁額が納められていた。また、八幡宮棟札５枚と喜太郎稲荷神社棟札７枚も納められていた。喜太郎稲荷神社は八幡在所地頭の天童氏の氏神として、同氏が羽州天童を居城としていた頃から祀られていた（現在も山形県天童市の舞鶴山に小路喜太郎稲荷神社が残る）。

現在の社殿は本殿のみ単立で東面し建っている。安永３年９月宮城郡陸方八幡村仮肝入栄吉が記した『八幡村　風土記御用書出』（宮城県史所収）には、

「　一、天童神社　一、小名　　久蔵様御拝領地之内　臺　、一、勧請　久蔵様御先祖羽州
　　天童御居城之節御勧請被成置慶長年中當村御在所御拝領之節御遷宮之由申傳候事
△一、社地　　一、社　辰巳向壹間作　一、鳥居　辰巳向
　一、長床　辰巳向竪四間　横弐間　　（以下略）」とある。

「辰巳向壹間作」の記事は、現状の本殿の規模と同一と考えられる。喜太郎稲荷神社本殿に関する藩政期棟札は５枚で、造営棟札１枚（寛延４年(1751)）と修理（屋根替）棟札２枚（天保13年（1842）、安政３年）、造営・修理内容不明他２枚（宝暦９年（1759）、文政11年（1828））近代以後は屋根替棟札が２枚（明治７年（1874）、昭和58年）。また、太平洋戦争末期の記録を示す棟札はない。

次に実測調査を基に、建築史および意匠の面から所見を述べたい。

一間社流造、屋根は銅板葺。妻飾りは、豕扠首で鏑懸魚。二軒繁垂木。大斗舟肘木で中備はない。さらに頭貫木鼻は矩形のままで繰形がない。向拝部と入側部は、虹梁で繋ぐ。水引虹梁と同平面象木鼻は正面にのみ繰り方を施し、背面は省略されている。水引虹梁上の蟇股は、本殿内部の蟇股の形状とは若干異なっているが同時期の意匠と考えられる。

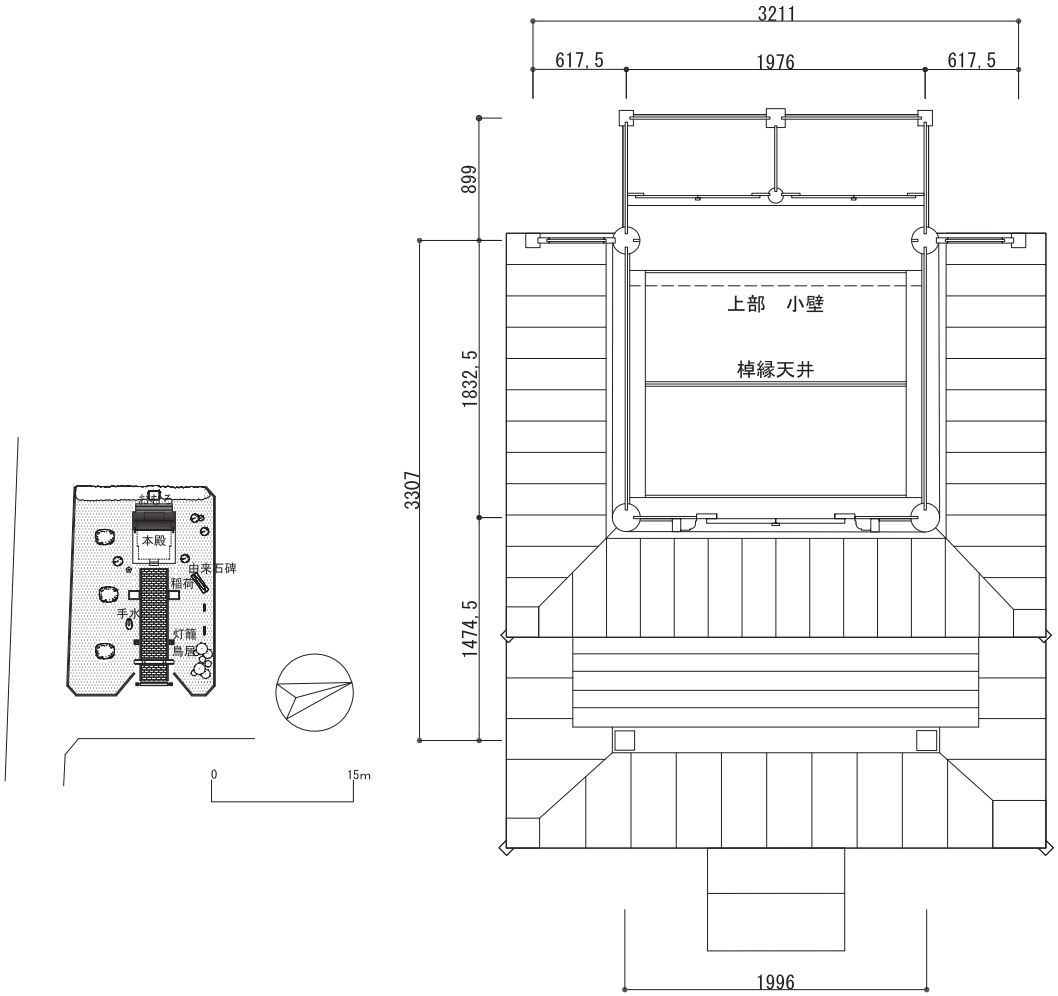


図12　喜太郎稲荷神社　配置図・本殿平面図

平面形状は、三方高縁に脇障子を施すが、高欄はない。本殿内部は一間四方で背後に半間の突出部を設け、二室の祭室を設けている。それぞれに板扉を設けている。この突出部は後補であり、円柱間は板壁であった。板壁より内側に１尺の所の上部に小壁が残存しており、元々の祭室がここの部分に設けられていたと考えられる。

現社殿の細部意匠は、向拝水引虹梁など改変されている部分が多い。本殿内部の蟇股や斗栱は18世紀中期頃の意匠を残す、寛延期の意匠と考えられる。

則ち、寛延期に再興造営され、その後屋根葺替えなどの保全修理が繰り返され、軸部などに大きな改変を加え現状に至っていると考えられる。

正面外観

背面・側面外観

向拝部　水引虹梁蟇股

向拝部　水引虹梁木鼻

⑶ 鎮守嶋観音堂（多賀城市八幡２－８－17　不磷寺境内）

もとは、八幡村の小名鎮守嶋の地にあったが、道路拡張工事のため、昭和62年に現在地に移築されたという。観音堂は、不磷寺の山門を潜って本堂に向かって左手にある白壁造方形屋根の覆屋の中に、ほぼ北面して建つ。

一間堂で柱間は約1100ｍｍ（３尺６寸）、四方に縁を巡らす。高欄はない。正面に桟唐戸の扉を開き、一間の向拝を設ける。向拝部分に４段の木階を設ける。屋根は方形木羽葺。４本の入側柱は内側と外側では形状が異なっている。それぞれ、外側の部分は丸柱状で内側が八角柱状であり、床下も同じ組み合わせである。柱は土台に載っており、縁束も土台に載る。垂木は一軒の繁垂木。正面のみ扇垂木の配りである。入側部は、大斗肘木であり中備はない。頭貫は木鼻部分に繰り形はなく加工を施さない矩形形状である。尚、丸桁木鼻を支える部分の肘木形状も同様に矩形形状。

向拝部分は、水引虹梁に蟇股を載せる。水引虹梁木鼻は平面象鼻。向拝柱上に皿斗を置きその上に大斗肘木で丸桁を承ける。向拝部と入側部を海老虹梁で繋ぐ。海老虹梁には繰形の絵様はない。向拝部の虹梁や木鼻や蟇股の繰形絵様が施されるのは正面のみで、背面は省略されている。又、向拝部の斗栱、虹梁、木鼻、蟇股は欅材。入側部は大斗のみ欅材。

細部意匠様式による年代判定は、省略手法が数多く見られることから難しい。特に入側部分での

判定は不可能である。向拝部分は元々、改変が多い部分と思われ、更に、先に記述したように背面の繰形絵様が省略されている。部分的ではあるが、蟇股や虹梁木鼻などは、江戸後期の意匠様式を示すと思われる。

次に、藩政期の史料により考察したい。

藩政期の造営史料は発見されていないが、安永３年９月の八幡村仮肝入栄吉による風土記御用書出には、

「一、仏閣　二

（前略）

一、鎮守嶋観音堂　宮城三拾三番札所之内十七番

一、小名　鎮守嶋

一、勧請　誰勧請と申義并年月共ニ相知不申候事

一、境内　竪弐間　横弐間　一、堂　南向三尺四面

一、別当　光徳院　　一、祭日　九月廿七日

（以下略）　　」とある。

「三尺四面」という堂規模は、現状平面図に示す規模と同等と考えられる。

僅かに残る細部意匠の様式からは、江戸後期意匠を読み取ることができるが、総体としては改変されていると考えられる。しかし、藩政期の堂規模とほぼ変わらない姿を残していると考えられ、また、屋根の形状が木羽葺を残すなど注目される建築である。

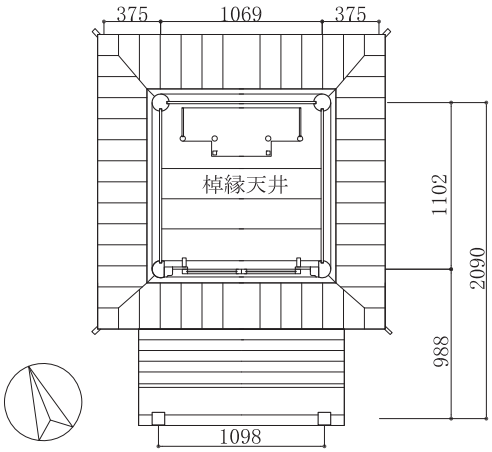


図 13　鎮守嶋観音堂平面図

覆屋の中の観音堂

木羽葺方形屋根

向拝部　水引虹梁など

扇垂木　海老虹梁

水引虹梁上の蟇股

２　宮城郡陸方　市川村

⑷ 陸奥総社宮　本殿（奥の院）・（弊殿（祝詞殿））・拝殿　（多賀城市市川字奏社１）

仙台城下原ノ町から塩竈に至る所謂、塩竈街道沿い北側に社地があり、鳥居をくぐり石段を登った先に広い境内が開け、社殿はほぼ南面して建つ。現在の社殿は本殿（神殿、奥の院）、弊殿（祝詞殿）、拝殿が連結した形状であるが、弊殿部分は明らかに新しい造作である。藩政期には「奏社明神社」、明治４年（1871）に「奏社宮」と改称し、現在は「陸奥総社宮」と称している。

安永３年（1774）９月宮城郡陸方市川村肝入市兵衛が記した『市川村　風土記御用書出』（宮城県史所収）には、

「 一、村鎮守　、一、奏社明神社　一、小名　奏社宮

一、勧請　誰勧請と申義并年月共ニ相知不申候得共鹽竈一宮十四末社之内ニ御座候事

一、社地　竪弐百間　横六拾間　一、社　辰巳向

一、本社　壹間作　一、拝殿　三間作　一、鐘楼　壹間半四面　一、鳥居　辰巳向

一、長床　東向　竪三間　横弐間　　（以下略）」とある。

本殿の「壹間作」は、現状の規模と同一と考えられるが、拝殿の「三間作」は桁行き３間に梁間が２間であるとも考えられる。現状の拝殿は梁行３間、桁行３間であり、一考を要す。また、弊殿に関する記述はない。

明治 40 年（1907）の『神社由緒調』の「宮城郡多賀城村市川字奏社　村社　奏社宮」項に

「 一、該當項目

本社ハ國幣中社塩釜神社随従第一ノ神ニシテ執奏ノ神ト云フ（中略）伊達氏代々塩釜社参詣毎ニ必ズ当社へ参詣金品ヲ奉納セラル（中略）維新前ハ奏社明神ト名稱セシモ明治四年七月奏社宮ト改稱ス村社ニ列セラル

二、認定事由

前項ニ依リ鎮座創立年詳ナラズト雖モ当今存在ノ神殿及祝詞殿國主ノ御寄進ヲ仰キ貞享四年六月廿九日修造ス拝殿ハ仙臺藩ノ領内寄進ニヨリ享保九年三月十日修造ト棟札ニアリ棟札写別紙ニアリ

三、（略）

四、社殿

製式種類　神殿屋根前後両流シ切妻筥棟鬼板附千木勝雄木揚ケ惣体柿葺前階五級高欄附三面廻リ椽高欄附正面板唐戸左右遣戸全殿白木造リ舛組象鼻若葉唐草ノ彫刻アリ銅具鍍金毛彫アリ祝詞殿白木造ニシテ屋根両流シ博風附柿葺ナリ

拝殿屋根入母屋博風附箱棟鬼板附惣体葦萱葺前階五級高欄附三面廻リ椽高欄附正面扉組唐戸三間左右遣戸全殿素木造リ象鼻舛組若葉唐草ノ彫刻銅具鍍金毛彫アリ

（以下略）」

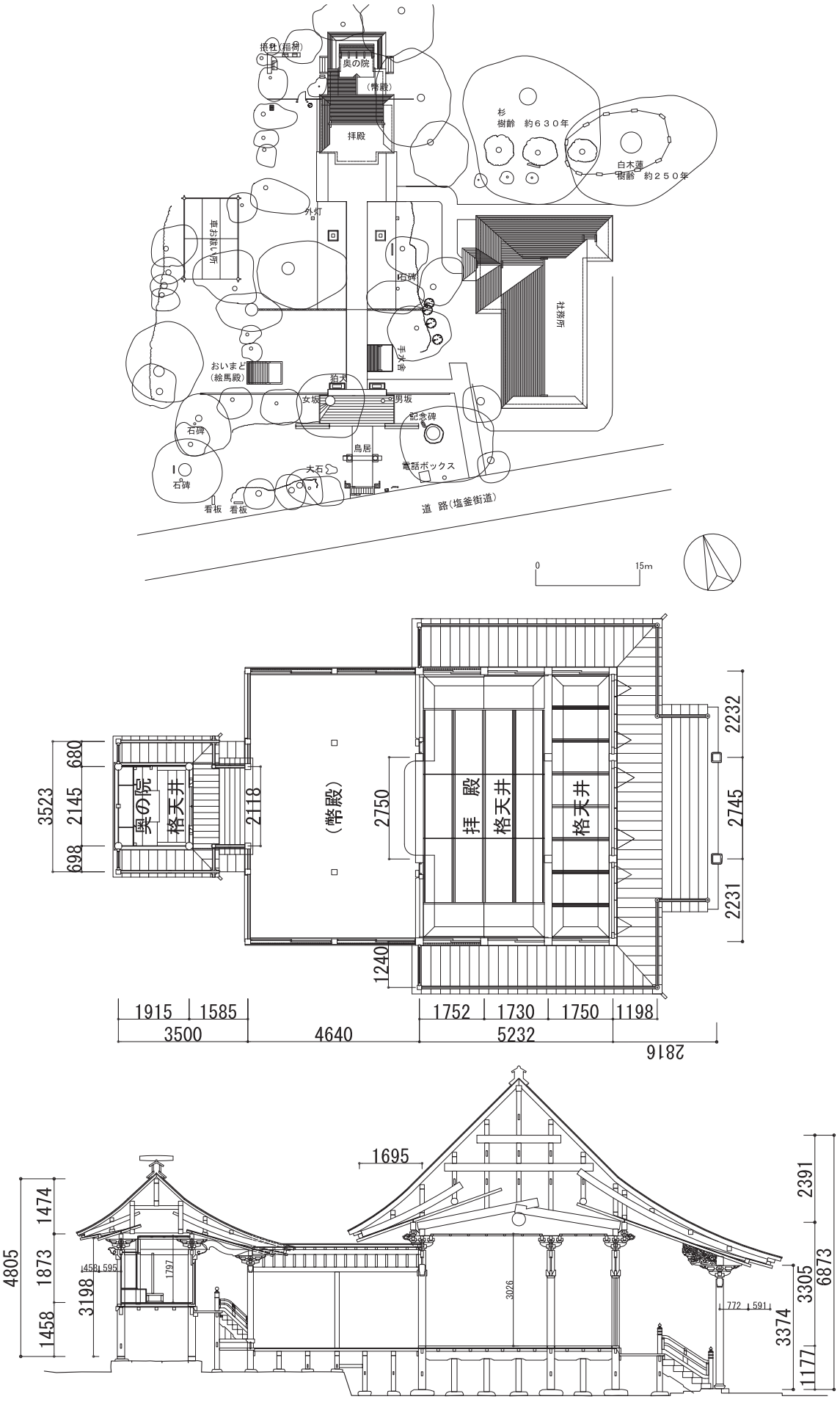


図 14　陸奥総社宮　配置図・平面図・断面図

また同文書に付された見取図には、神殿（本殿）図部分の桁行方向に「七尺五寸」梁行き方向に「七尺」、祝詞殿（弊殿）図部分の桁行方向に「二間」梁行き方向に「一間弐尺」、拝殿図部分の桁行方向に「四間」梁行き方向に「三間」と書き込まれている。

神殿はほぼ現状本殿の規模（真々ではなく、外法寸法）と合致し、拝殿は桁行が３間であるが寸法がおおよそ４間（7208 mm、約 24 尺）となりほぼ合致すると考えられる。一方で祝詞殿（弊殿）の記述は実測寸法とはかなりかけ離れている。今回の調査時の聞き取りによると、祝詞殿部分は、室内空間ではなく、屋根が架されただけで、床のない土間の空間であったとのことである。現在の弊殿は神殿と拝殿を連結した室内空間であり、神殿の屋根と取り合う形態であるが、少なくとも明治 40 年時点では弊殿の屋根が神殿と拝殿の屋根と取り合わない所謂、「造合い」になっていたと考えられる。

また、今回の調査で陸奥総社宮社殿に関する棟札６枚と屋根裏に打ち付けられている造営札４枚が発見された。このうち、藩政期のものは棟札が４枚、造営札が１枚である。

内容は再興造営が３枚で、貞享４年（1687）（本殿・拝殿　大工内藤長右衛門吉久、同内藤長吉良定）、正徳６年（1716）（本殿・拝殿　大工棟梁堀川加平次廣次）、享保 19 年（1734）（拝殿　大工棟梁　加藤權七郎勝治）。修理棟札が１枚で、元禄 14 年（1701）（神祠一基修理　工匠鈴木庄内重長　他）。屋根替造営札が１枚、慶応３年（1867）（本殿屋根替　棟梁　加藤熊右衛門）。

次に実測調査を基に、建築史および意匠の面から所見を述べたい。

本殿は一間社流造で屋根は銅板葺、元は柿葺。箱棟に千木と５本の勝雄木を載せる。妻飾りは虹梁大瓶束、鏑懸魚を吊す。二軒吹き寄せ垂木。斗栱は平三斗。中備は蟇股。本殿正面の間に板扉、東側面に片引き舞良戸を設ける。内部は奥に壇を設け、天井は格天井で、床は二重に板を敷いている。入側と向拝は海老虹梁で繋ぐ。三方に高縁を巡らし組高欄を設ける。向拝部分には擬宝珠を施す。本殿の浜床部分は外部には残るが、内部は弊殿床となっている。

弊殿は、中央部に切妻の屋根を架し、東側と西側に庇屋根を設けている。天井は化粧屋根裏。元は、間口１間ほどの柿葺の切妻屋根で、土間床で壁のないものであった。

拝殿は桁行き３間（実寸は約４間）梁行き３間で入母屋銅板葺。もとは、葦萱葺であった。妻飾りは虹梁大瓶束、三花懸魚を吊す。一軒の吹き寄せ垂木。三方に高縁を巡らし宝珠高欄を施す。斗栱は出組で中備は蟇股。向拝の水引虹梁と同立体獅子鼻は戦後の造作。入側との繋ぎ虹梁はなく、手挟を架す。南側１間×３間の前室とその奥に２間×３間の室からなる。共に格天井で畳床。正面３間は両折り桟唐戸、東西の側面は、２間が舞良戸の引き違い。１間が格子を備えた引き違いガラス窓。元は、側面は北側１間は板壁。背面３間の内両脇２間が板壁で、中央の間のみが開口部となり、本殿へはここから降りて行った。前室と後室境の３間は、全て引き違いの格子戸。

次に細部意匠について記す。

本殿では、頭貫木鼻は鼻先がかなり上向きであり、貞享期の意匠を伺わせる。しかし、その他の蟇股などの意匠は、それより降った正徳、享保期以降の意匠と思われる。

拝殿では、向拝部の水引虹梁や同立体獅子頭木鼻や蟇股と拝殿と弊殿境中央間上部に架される虹梁は戦後の造作であることが、聞き取りより明らかになった。

拝殿では、入側列の中備に蟇股を備えるが、外側の意匠と内部の意匠が異なり、また、内部でも南側１間の前室部分の蟇股と奥２間の部分の蟇股の意匠が違う。内部南側前室部分の蟇股と外部蟇股は同一である。これら蟇股と頭貫木鼻や斗栱の拳鼻などは享保期頃の意匠と思われる。

拝殿正面外観

拝殿側面外観

拝殿内部　蟇股　（北側後室）

拝殿内部　蟇股　（南側前室）

本殿側面外観

本殿　妻飾り虹梁大瓶束

本殿向拝部　水引虹梁蟇股

本殿向拝部　水引虹梁木鼻

本殿入側部中備　蟇股

本殿向拝部　海老虹梁

⑸ 荒脛巾神社　本殿　（多賀城市市川）

陸奥総社宮から塩竈街道を東に 100 mほどのところを南側の小路を降り人家が途切れる当たりに東側に鳥居が見えてくる。西面する鳥居をくぐり更に東に進むと民家の敷地奥に社地がある。本殿は覆屋の中に西面して建つ。古くから足の神様として知られ、旅の安全を祈願する人々によって厚く信仰されてきた。次に記す風土記御用書出にも、かつては祈願成就の折、脛巾を奉納されて来たと記されている。

安永３年の『市川村　風土記御用書出』（宮城県史所収）には、

「 一、荒脛巾神社

一、小名　荒脛巾但太宰九吉様御知行所之内

一、勧請　誰勧請と申義并年月共ニ相知不申候得共鹽竈一宮十四末社之内ニ御座候
　　由右御社江祈願仕成就仕候得ハ脛巾を相納来申候事

△一、社地　　一、社　西向五尺四面

一、御社領　弐貫文　右ハ　御當代様明和五年十二月廿八日御寄附有之候事

一、鳥居　西向　△一、長床

一、額　社之竪額荒脛巾明神五字　但筆者相知不申候事　△一、地主

一、別當　鹽竈御社家鈴木壱岐守様御預ニ付別當無御座候事（以下略）」

現本殿と鳥居は西向きで上記内容とは合致するが、「五尺四面」とは寸法も、平面形状も一致しない。「五尺四面」は、五尺四方の矩形平面と考えられる。また、現本殿は梁行き約４尺で桁行４尺５寸であり、規模は近似すると考えられる。一方、現社殿の向拝部の水引虹梁や同木鼻及び蟇股は、江戸後期の様式と思われる。

今回の調査では、本殿内部の調査を行うことができなかったが、一応建築的所見を述べる。一間社流造で、三方に高縁を廻らすが、高欄はない。屋根はトタン葺。妻飾りは豕扠首だが、新しい材。また、拝には猪目懸魚を吊す。一軒疎垂木で柱筋と水引虹梁上蟇股筋のみ吹き寄せ垂木を配す。斗栱は向拝柱にのみ平三斗を載せ、入側柱上は舟肘木が直接載る。中備なし。向拝と入側柱を虹梁で繋ぐ。水引虹梁上にのみ蟇股が載るが、正面のみ繰り形が施され、裏面は省略されている。水引虹梁も裏面に若葉紋などは彫られていない。

屋根を初めとして軸部各所に腐朽が進み、できうる限り早い時期の保全対策が望まれる。

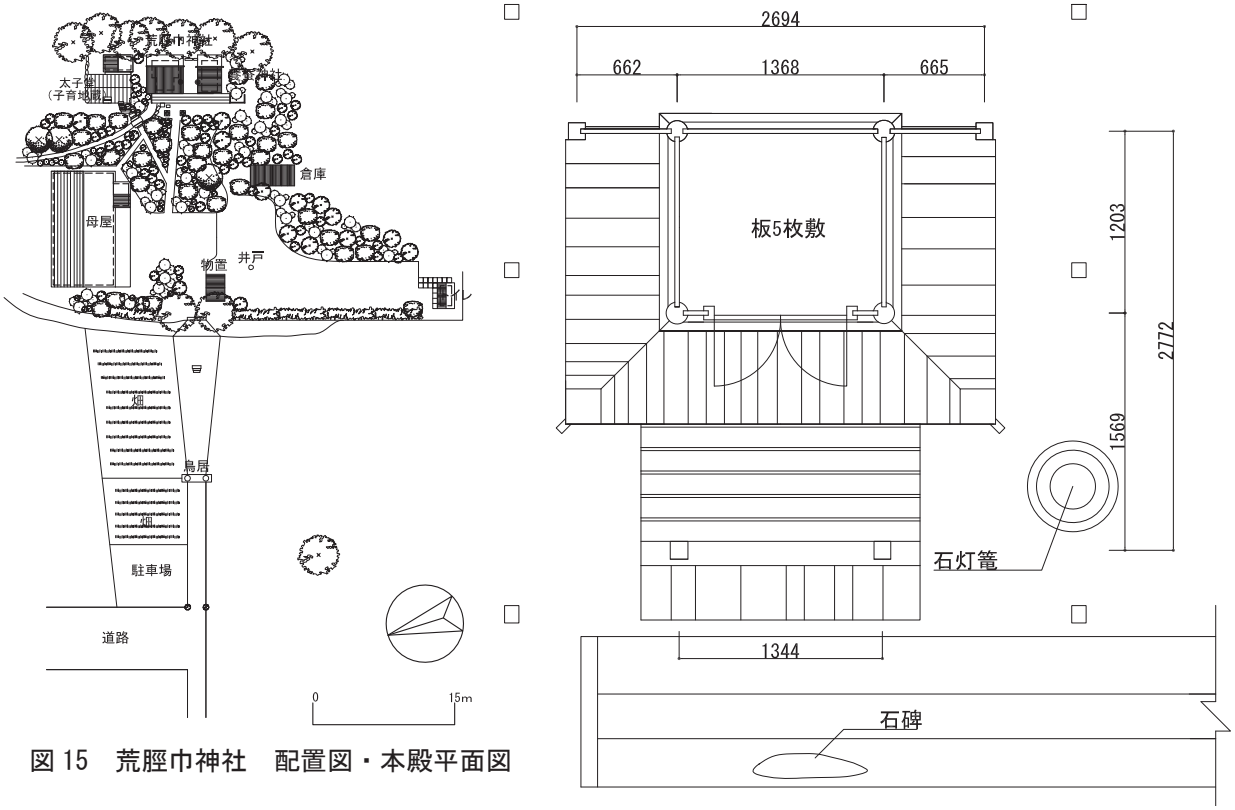


図 15　荒脛巾神社　配置図・本殿平面図

本殿　全景

本殿　正面

本殿側面外観

本殿　背面外観

本殿　妻飾り　豕扠首

本殿　向拝部水引虹梁木鼻

⑹ 貴船神社　本殿（多賀城市市川）

陸奥総社宮から西へ約 800 mほどのところにあり、街道は南西方向に降る坂道となる。街道から階段を登り南東向きの鳥居をくぐり参道を進むと樫の大木があり、ほぼ直角に曲がり更に階段を登ると入母屋屋根本瓦葺の覆堂の中に、ほぼ南面して本殿が建つ。

別名「白山神社」とも呼ばれている。後述する安永の風土記御用書出や本殿内の棟札にも「白山社」、「白山権現宮」と記されている。参道登り口脇の縁起を記す札には、古く山城国愛宕郡鞍馬村の貴船神社の分霊を鹽竈神社に奉祀し、元禄期に鹽竈神社社殿改修の時、この地に遷宮したという「塩松勝譜」の説を記されている。これには異説もあり、また、貴船神社と白山神社との関係も不詳である。このあたりの経緯については後考を待ちたい。また、本殿の覆堂は昭和 56 年に建てられたと記されているが、この社を管理する K 家からの聞き取りでは、古くは萱葺だったとのことであり、昭和 56 年以前から覆堂があったと考えられる。

安永３年の『市川村　風土記御用書出』（宮城県史所収）には、

「　一、白山社　一、小名　金山
　一、勧請　誰勧請と申義并年月共相知不申候事
　一、社地　竪三拾間　横三拾間　一、社　南向三尺作
　一、鳥居　東向　　△一、長床　一、額　鳥居竪額白山宮三字　但筆者相知不申候事
　一、地主　新屋敷　甚兵衛　一、別當　右　甚兵衛　（以下略）　」とある。

本殿と鳥居の向は、ほぼ合致すると考える。また、本殿が「三尺作」と記されるが、実測値は桁行き約３尺（964,5 mm）、梁行き５尺。但し身舎部分が約２尺６寸（790 mm）に向拝部分が約２尺５寸（745 mm）である。ほぼ規模も「三尺作」と考えても良いと考えられる。

本殿内に安置されていた宝暦６年（1756）棟札も確認された。

表には「奉造営營白山權現宮一宇國家安全萬民豊饒所」が中央に記され、更に、偈文・施主・工匠が記される。施主は「市川村金山屋敷菊地七兵衛」、工匠は「大工棟梁鹽竈住八□喜惣次永春」、「宮大工　勘兵衛　與史郎　喜傳次」と記されている。裏に導師と「寶暦六丙子歳　十二月祥日」が記されている。

本殿の蟇股、頭貫木鼻、水引虹梁の立体象鼻、虹梁の渦紋などの細部意匠は、江戸中期の様式であり、棟札の年号と矛盾はない。

一間社流造、三方に高縁を廻らし高欄が施されている。しかし高欄部分は地覆と平桁が一部残っているだけである。元は組高欄形式であったと思われる。屋根は木羽葺で妻飾りは虹梁大瓶束、鏑懸魚を吊す。二軒繁垂木。斗栱は平三斗で、中備は蟇股。入側と向拝を海老虹梁で繋ぐ。水引虹梁の木鼻は立体象鼻。本殿内部には、向唐破風の庇を付す朱塗りの祭壇が設けられている。

本殿建築は、高欄部分が一部欠損しているものの、江戸中期、宝暦期の意匠を伝える貴重な遺構である。

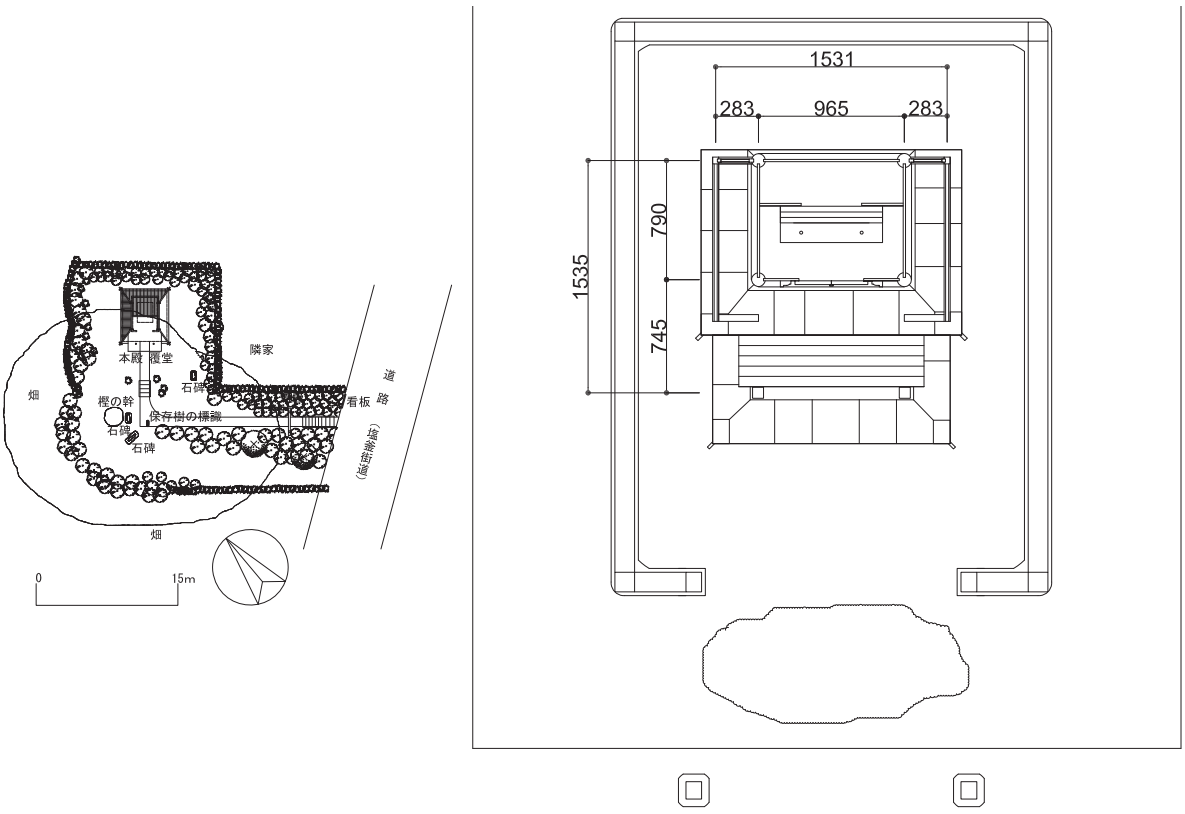


図 16　貴船神社　配置図・本殿平面図

本殿正面外観

本殿側面外観

本殿　向拝部　水引虹梁木鼻
立体象鼻

本殿　向拝部　水引虹梁蟇股

本殿　妻飾り　虹梁大瓶束

本殿　海老虹梁

⑺ K 家（旧佐藤家）　氏神神社（大日霊神社）　社殿　（多賀城市市川）

塩竈街道を多賀城神社角から東に進み、多賀城跡管理事務所の駐車所の手前の北側に K 家の屋敷地がある。主屋棟の北西部の高台に社地がある。石鳥居を潜り、石階を登った先の覆屋の中に、南面して社殿がある。現在の覆屋は切妻屋根で波板トタン葺であるが、元は瓦葺、更に古くは萱葺であったと言われている。

この屋敷地は、この地の大畑地区の佐藤大本家のものであったが、昭和初期に山形県から移住してきた K 家が所有したという。氏神神社社殿の前にある石鳥居には、「昭和四年二月　菊池善作　石工　東村山郡出羽村漆山　鈴木栄吉」と刻まれている。この辺りの状況を裏付けている。その後、昭和 7 年に火事があり、この社殿と井戸棟以外は焼けたと言われている。

社殿内に明治 25 年（1892）の「御宮造營大日霊神社」と記された棟札が納められている。

（表）「　　神官　市川永治　　敬

□　御宮造營大日霊神社邑内安全家内繁營守護

社主　佐藤長兵衛　白」

（裏）「　　大工　高橋榮之助

奉遷座明治二十五年旧九月十一日

屋根葺　青木清次郎　」

社主が「佐藤長兵衛」とあり、佐藤家との関わりを示す記事と考えられるが、佐藤家の先祖の名前であるか確認が出来ない。後考を待ちたい。但し、社殿内の板碑には大日如来を表わす梵字が刻まれていることや、近隣の人々が、当社を「大日如来」と呼んでいることから、この棟札は当社殿のものと考えられる。

また、市川村の風土記御用書出にも該当する堂社の記事は見当たらない。

次に、建築史的な所見を述べる。

社殿形式は、一間社流造。脇障子を設け、三方に高縁を廻らすが、高欄はない。元々は高欄があったと思われるが、縁部分の腐朽が進み、改変していると思われ、痕跡も不明である。正面に５段の木階を置き更に浜床を設ける。浜床部分も腐朽が著しい。本殿内部には、地面から突き出た板碑を祀っている。本殿建築はその板碑を覆うように造作されている。入側柱は丸柱で高縁床束と同様に土台に載っている。

屋根は木羽葺であり、妻飾りは虹梁大瓶束形式。破風に鏑懸魚を吊す。二軒繁垂木。斗栱は平三斗で、中備は蟇股。入側と向拝を海老虹梁で繋ぐ。水引虹梁の木鼻は、立体象鼻。これらの細部意匠の様式は近くの貴船神社の意匠と酷似している。ほぼ同時期の宝暦期江戸中期の様式と考えられる。社殿建築とそれを覆う覆屋建築もかなり腐朽している部分があり、早急の保全対策が求められる。社殿建築は江戸中期の質の高い建築様式を残す。近くの貴船神社本殿とともに、この地の文化遺産として非常に価値が高い遺構であると考えられる。

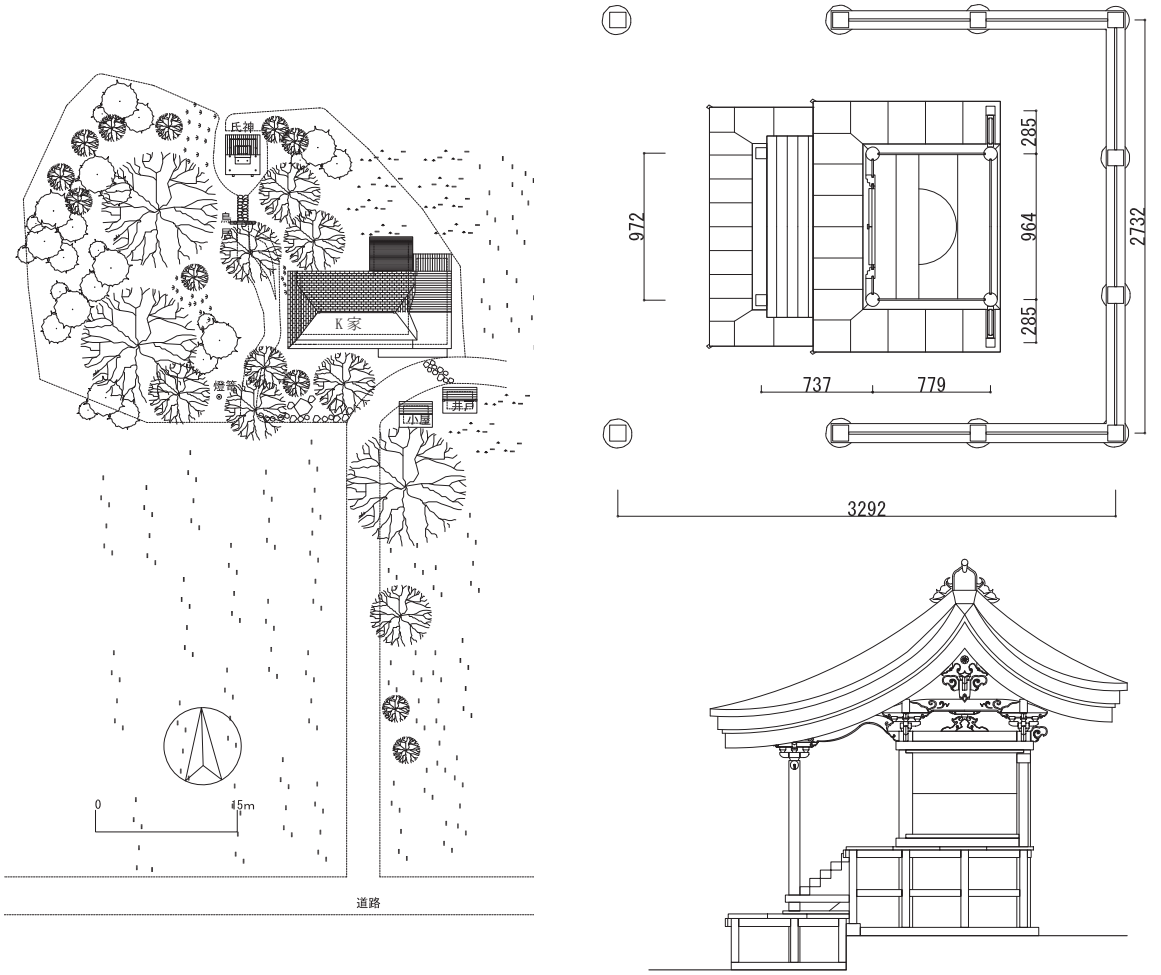


図 17　K 家氏神神社（大日霊神社）　配置図・社殿平面図・立面図

南正面外観

東側面外観

入側部頭貫木鼻

妻飾　虹梁大瓶束と蟇股

水引虹梁木鼻

海老虹梁

水引虹梁蟇股

オモテ

ウラ

大日霊神社造営棟札（明治 25 年）

３　宮城郡陸方　笠神村

⑻ 仁和多利神社　本殿　（多賀城市笠神１－７）

藩政期には「仁和田里権現社」と称していたが、明治４年 (1871) に権現号を廃し、明治 11 年 (1878) に仁和多利神社の社号となった。また、社地も藩政期の笠神村鶴谷から移転している。戦前に多賀城海軍工廠開設に伴い、社地が接収され、一時、大代の柏木神社社地に移され、昭和 32 年に現在地に遷座されたものである。

現在は、西園寺（船塚観音堂所在地）の南に一つ沢を隔てた住宅地の丘陵地に境内がある。本殿背後から、西園寺境内が見下ろせるが、西園寺側から直接仁和多利神社にアクセスは出来ない。沢を大きく迂回して塩竈市立第三中学校前の道路に進み、更に北側に登る坂道の一番奥に社地がある。仁和多利神社の社殿は、寄棟造り鉄板葺きの拝殿背面に弊殿が接続し、その奥に離れて、一間社流造の本殿が配置されている。拝殿と弊殿は後補のものであり、安永の風土記書出にも社殿として「四尺作」と鳥居の記載しか無い。

則ち、元々、本殿が単独１棟のみであったが、創立以降修理を繰り返し、更には、社地も移転し、昭和 32 年に拝殿を新築し、その後、弊殿も新設された。

本殿の建築史的所見を次に述べたい。

社殿形式は、一間社流造。三方に縁を巡らせるが、高欄はない。向拝柱背面に高欄の平桁・架木・地覆の痕跡が残る。また、脇障子は、新しい造作である。正面に板扉を設け、５段の木階を設け更に浜床を備える。入側の４本の丸柱は床下も丸形で縁束と共通の土台に載る。屋根は銅板葺で、千木と鰹木を載せる。屋根は、元は木羽葺とのこと。妻飾りは、虹梁大瓶束形式で江戸後期頃の意匠と思われる。破風には三花懸魚を吊す。二軒の繁垂木で出組斗栱。支輪を設ける。

入側部の中備は、正面と側面には、頭貫木鼻を付した柱上部に出組斗栱を載せた変則的な詰組を載せる。詰組は、本殿内部では大斗や木鼻が省略されている。背面には中備がない。向拝柱とは海老虹梁で繋ぐ。

これら、虹梁、海老虹梁、斗栱、大瓶束に施される繰り形絵様は、江戸後期頃の意匠と考えられる。

向拝部分の意匠は、水引虹梁に蟇股が載り、水引虹梁木鼻は立体象鼻。江戸時代後期以前では、立体木鼻を施す事例は、藩営の造営では数多く見られるが、社寺や村方が主体の造営では数少ない。多賀城市市川の貴船神社本殿（宝暦６年（1756）、立体象鼻）や菊池家氏神神社社殿（宝暦期、立体象鼻）の水引虹梁木鼻、多賀城市八幡宮内の八幡神社拝殿（旧本殿、江戸末期、立体獅子・龍）の二重水引虹梁木鼻も立体木鼻であり、近い地域に複数事例が存在することは注目される。仁和多利神社の立体象鼻は貴船神社の象鼻よりも新しいが、大幅に時代が降るものではない。向拝部分にのみ蟇股が残るが、様式的には江戸前期頃の意匠とも考えられる。

次に、造営史料や古文書史料を基に、現本殿の建立時期を考えてみたい。

仁和田里權現宮（現仁和多利神社）に関する造営史料は元禄 13 年（1700）本殿建立棟札が１枚（複数の年紀記事有り）、文政 11 年（1828）屋根替棟札、明治４年建立棟札が１枚、明治 11 年本殿修復棟札が１枚、そして、昭和 32 年拝殿新築棟札が１枚である。藩政期における造営史料の元禄 13 年の本殿建立棟札裏面に追記される形で元文４年 (1739) の「鳥居共」の「建立」が記され、また別の部分に年紀や造営内容が不明である記事が記されている。表面には壇越や願主などの項目は記されず、「宮城郡笠神村肝煎本江氏　九郎右衛門　叅右衛門」や御百姓の名前が 27 名列記されている。元禄期の造営は同社の氏子である笠神村御百姓らが造営活動の主体であると考えられる。表面には「同郡（宮城郡）八幡村大工伏谷作左衛門」と「同郡（宮城郡）円山住木挽成澤五郎七」が列記されている。大工は八幡村、木挽は笠神村円山に居住していた。

安永３年（1774）９月の笠神村風土記御用書出には、

「　一、神社　三
　一、仁波多里権現社　　一、小名　鶴谷
　一、勧請　誰勧請と申義并年月共ニ相知不申候事
　一、社地　［缺］　　一、社　東向四尺作
　一、鳥居　北東向　　一、祭日　九月十九日
　　（以下略）　　」とある。

社の向きは東向きから南向きにほぼ 90 度変化しているが、「四尺作」の規模は、現状の入側部分の梁行き 1000 mm（3尺3寸）、桁行き 1214 mm（4尺1分）の梁行き規模に符合していると考えられる。

現本殿の創建は元禄 13 年であるが当時の細部意匠様式を残すのは僅かに向拝部分の蟇股や一部の実肘木のみであり、多くの細部意匠の様式は江戸後期頃（1780 年頃）の意匠様式を示していると考えられる。

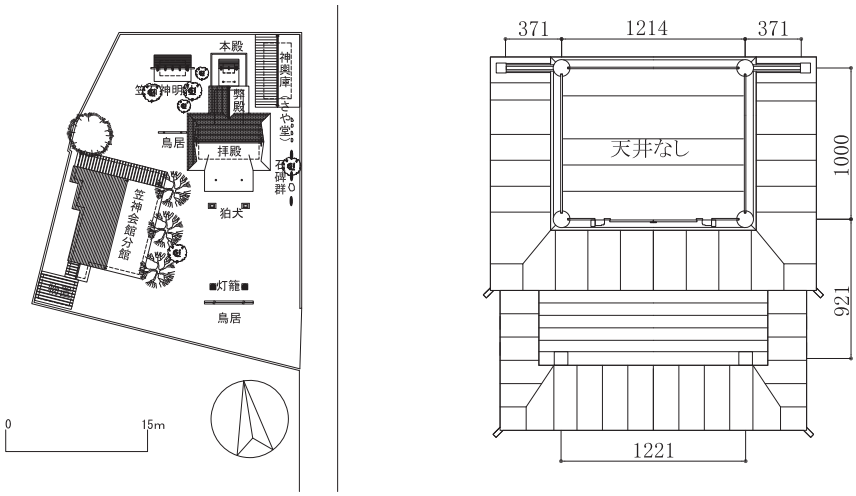


図 18　仁和多利神社　配置図・本殿平面図

本殿外観　千木・鰹木

本殿 妻飾り 虹梁大瓶束 出組の詰組

水引虹梁　蟇股

向拝入側部　海老虹梁

水引虹梁立体象鼻

本殿側面外観　浜床
木階　縁　脇障子

⑼ 船塚観音堂（多賀城市笠神１－21－60　西園寺境内）

現在は移築されて西園寺の境内、本堂や庫裡から境内の東の墓地に向かう坂道途中の覆屋の中に南面して配置されている。移築の経緯などは不明である。

一間堂で鉄板葺の方形屋根。平面形状は四方に縁を廻らし、正面に向拝を設け６段の木階を付す。木階も含め高欄はない。入側柱は、床上が丸柱、床下は八角柱で土台に載る。縁束も土台に載る。軒は二軒で繁垂木。中備はなく、柱上の斗栱は平三斗。円柱上部に台輪を載せるが、頭貫木鼻は台輪仕様の形状ではない。また、柱に粽を施していないことや、柱上部に載る斗栱も和様であることなど、様々な様式意匠が用いられている。入側部分の斗栱や木鼻などの繰形様式は藩政期のもので江戸中期から後期の様式と考えられる。向拝部分は、水引虹梁上に蟇股を載せる様式。向拝柱は几帳面を施した角柱で木製の礎盤に載る。向拝柱上の斗栱は平三斗。大斗は、皿斗上に載る。また枓肘木は禅宗様の意匠である。入側柱と向拝柱とを繋ぐ梁はなく、手挟を設けている。向拝虹梁と蟇股は背面の繰形絵様が省略されている。虹梁木鼻や向拝屋根側面のすがる破風の下り懸魚は近代の新しい様式。入側柱や横嵌め板壁、地覆長押、垂木の材は杉と思われるが、その他の内法長押、頭貫、台輪、斗栱など多くの部材は欅材を用いていると思われる。

封内風土記には、

「笠神邑。戸口凡廿六。（中略）佛宇一。舟塚山観音堂。不詳何時創建。（後略）」とあり、

また、安永３年９月の笠神村風土記御用書出には、

「　一、仏閣　一
　一、観音堂　一、小名　［缺］
　一、勧請　誰勧請と申義并年月共ニ相知不申候事
　一、境内　竪十五間　横四間　　一、堂　南向弐尺作
　一、地主　沼屋敷　栄吉
　一、別当　右　栄吉　　一、祭日　九月十九日　」とある。

堂の向きはほぼ同じ向きのままであり、「弐尺作」も実測寸法と矛盾はない。また、建築様式も一部近代以降の部分がみられるが、総体的には、江戸後期頃の意匠を残していると考えられる。

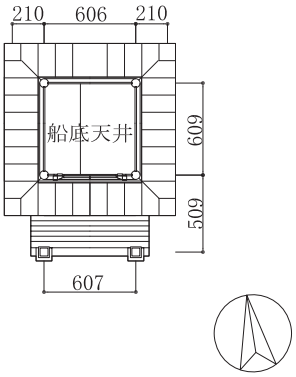


図 19　船塚観音堂平面図

覆屋の中　正面外観

側面外観

向拝部水引虹梁・蟇股

入側と向拝部分

4　宮城郡陸方　大代村

(10) 柏木神社　護国神社社殿（旧柏木神社本殿）（多賀城市大代 5 － 17 － 50）

元々の柏木神社本殿は、広大な神社境内の現在の柏木神社社殿（拝殿･幣殿･本殿）の西脇に、「護国神社」社殿として配置されている。社殿建築の移転、転用だけではなく、神社社地自体も移転を繰り返しており、やや複雑である。

柏木神社の旧社地は、笠神村元船場にあり、明治 42 年（1909）に笠神村上ノ台の仁和多利神社（現笠神 1 丁目）に合祀された後も、社殿はそのまま元船場に残った。同年に須賀神社（現塩竈市牛生町）も、仁和多利神社に合祀されるが、柏木神社同様、社殿は牛生に残った。その後、仁和多利神社は、昭和 18 年に多賀城海軍工廠の開廠及び用地の開削にあたり、現在の地、大代字中峯に移築された。 昭和 25 年に仁和多利神社本殿が笠神字花立に移築され、柏木神社と仁和多利神社は分離された。この時、柏木神社の本殿として、元船場にあった旧柏木神社本殿を据えた。そして、後の昭和 36 年に須賀神社が塩竈市牛生に遷座された。柏木神社の拝殿は、旧仁和多利神社拝殿のものであると云われる。更に、昭和 43 年に柏木神社本殿として新しく現社殿を建立され、さらに、幣殿も建立された。そして、旧本殿は護国神社社殿として、現本殿西脇に移築された。

即ち、現柏木神社社殿は、本殿と幣殿が昭和期の建立、拝殿は明治期の建立である。

元々の柏木神社本殿は、境内社護国神社社殿として残っているのである。

この旧本殿について藩政期の資料により比較考察してみる。尚、棟札などの造営史料は発見されていない。

安永３年（1774）の大代村風土記御用書出には

「 一、村鎮守

一、柏木明神社　　一、小名　柏木

一、勧請　誰勧請と申儀幷年月共ニ相知不申候事

一、社地　竪十六間　横十二間　　一、社　東向四間作　　一、鳥居　東向

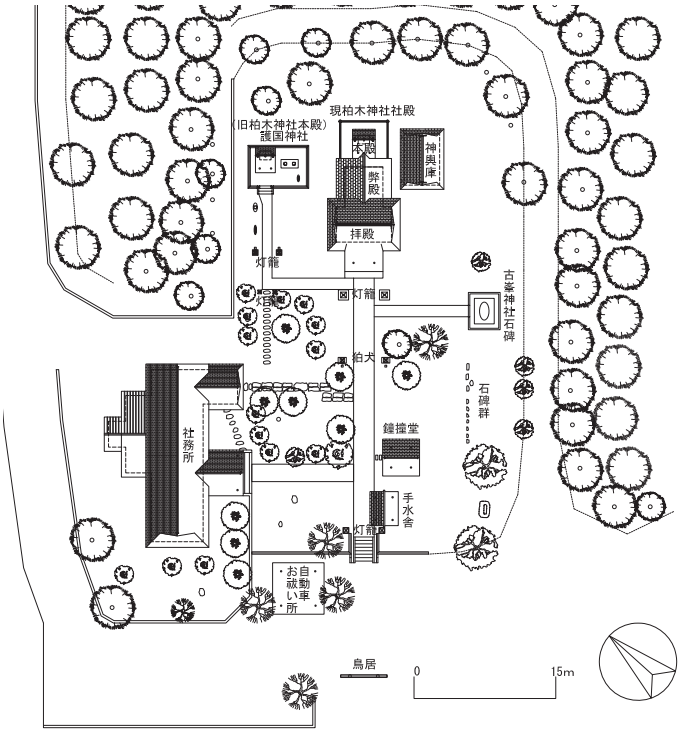
一、地主　西屋敷　善兵衛　　一、別當　右　善兵衛

一、祭日　九月二十七日　　」とある。

社殿が四間四方で東向きであったとの記事であるが、方位も規模も現存する社殿現状とは異なる。先ず、現社殿の方位は南向きである。このことは、社地の移転に依るものである。次に社殿規模であるが、「四間作」即ち四間四方の建物は、社殿規模として大きすぎる。現社殿の入側部分は1214 mm× 1039 mm（４尺×３尺４寸）であり、四尺四方と考えれば、上記記述の「四間作」は、「四尺作」の誤記ではないかと考えられる。詳しくは、後述するが、現社殿は、江戸後期の建築様式を備えていることからも誤記説は首肯されると考えられる。

次に、建築史的な所見を述べる。

社殿形式は、一間社流造。高さ約 500 mmのコンクリート基壇の上に建てられている。三方に高縁を廻らすが、高欄はない。正面に板扉を設け、５段の木階を配し浜床を備える。入側の４本の柱は丸柱で、床下は八角形であり、縁束と共通の土台に載る。屋根は鉄板葺で、千木と勝男木３本を載せる。妻飾りは虹梁大瓶束笈形付きである。破風に鏑懸魚を吊す。二軒の繁垂木で斗栱は平三斗。入側部分の中備は、四面とも蟇股である。向拝柱とは、海老虹梁繋ぐ。水引虹梁木鼻は平面木鼻。水引虹梁に載る蟇股は入側部の蟇股と比して形がやや崩れ後補の部材と思われる。この蟇股以外は、18 世紀後半頃（江戸後期）の建築意匠様式と考えられる。また、社殿の各部には近代のペンキ塗装（朱・青・白）が施されている。御殿内部は総体素木であり、外部の彩色は元来なかったと考えられる。



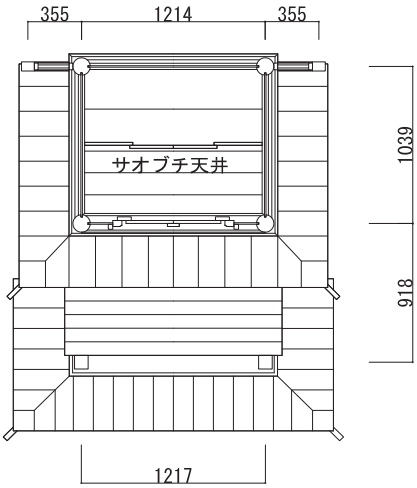


図 20　柏木神社　配置図・護国神社社殿（旧本殿）平面図

東側外観

西側外観

水引虹梁・木鼻・蟇股

妻飾　虹梁大瓶束笈形付

頭貫木鼻

海老虹梁

５　宮城郡陸方　田中村

(11) 志引観音堂　（多賀城市東田中２－28）

市内東田中２丁目の志引公園北東の小径沿いに志引石があり、志引石より南に小高い丘に続くコンクリート製の階段がある。この階段を登り、鳥居を潜ると右手に観音堂の覆屋（３間×２間半）がある。観音堂はこの中に納められている。

観音堂の内部には、明治 44 年（1911）の遷宮を記す祠裏板墨書と、昭和６年の千引神社遥拝所建立棟札が納められていた。江戸期の造営史料は発見されなかった。

安永３年（1774）田中村風土記御用書出によると

「 一、仏閣　一

一、村鎮守

一、千引観音堂　　宮城三拾三番札所之内卅弐番

一、小名　千引

一、勧請　誰勧請と申儀幷年月共ニ相知不申候事

一、堂　南向三尺四面

一、地主　御村空地ニ付地主別當無御座候事
一、祭日　八月廿三日　　」とある。
詳しくは後述するが、堂の規模と向きは現在の観音堂と一致すると考えられる。
また、上記の資料には鳥居などの記述はない。江戸期には、境内に鳥居などはなかったと考えられる。
次に、明治 44 年の遷宮記録には
「 陸前国宮城郡多賀城村
大字東田中鎮座
邨社千引神社御神璽
明治四拾四歳拾弐月四日遷宮行事
奉仕社掌　武本時保
社守区長　赤井善兵衛
氏子惣代人伊藤源三郎
小川孫吉
小川寅吉」とあり、
村社格で「千引神社」として遷宮されている。
昭和６年千引神社遥拝所建立棟札には、
（表）「　天壌無窮　五穀豊穣　諸願成就　社掌　本郷勝治
奉　千引神社遙拝所建立　一宇
國家安全　萬民安楽　厄災消除　」
（裏）「　東田中区　区長兼氏子総代　相澤巳之吉　大工　赤井善作
氏子総代　伊藤源三郎　仝　鈴木善次郎
区長代理　赤井大次郎　世話係総代　相澤力蔵
上棟　昭和六年蕾正月廿三日　社守　赤井春作　仝　伊藤辰三郎
鞘堂奉献者小川六之助　賽銭箱奉献者小川りゑ
鳥居奉献者鈴木よし　幕奉献者小川捨松
手水盤奉献者遠藤やす
コンクリー御坂奉献者　赤井春作
仝　小川新吉
仝　遠藤善松
菖蒲田濱和泉吉治より
堂取戻世話人
阿部勇太郎　」
と記されている。
堂建物が一時、この地から、別の地に移築されこの時に戻った経緯が記されている。更に、この時、鞘堂、鳥居、手水盤やコンクリート坂などが整備されたことが判る。また、昭和初期までは「千引」と記されていることが判る。
次に、建築史的な所見を述べる。
建物は三尺四方で四方に切目縁を巡らす。入側柱４本は丸柱。正面に板扉を吊すが、弊軸などの扉廻りの造作は簡略化されている。３段の木階の先に向拝柱が設けられている。入側と向拝を繋ぐ梁はなく、向拝柱上部に手挟を置く。入側柱、縁束、向拝柱いずれも土台に載り、土台同士は連結されている。屋根は方形造鉄板葺。二軒繁垂木。入側部柱には柱上に台輪を廻し、大斗舟肘木を置くのみで、中備はない。頭貫の木鼻もない。向拝の水引虹梁木鼻は平面象鼻であり、虹梁上に蟇股を置く。これら、向拝部分の部材には正面のみ繰形が施され、背面は省略されている。入側部分に

は、建築様式を判断出来る細部意匠部材がなく、向拝部分の限られた部材の細部意匠により判断せざるを得ない。おおよそ、18 世紀末の江戸後期頃の意匠様式と判断される。

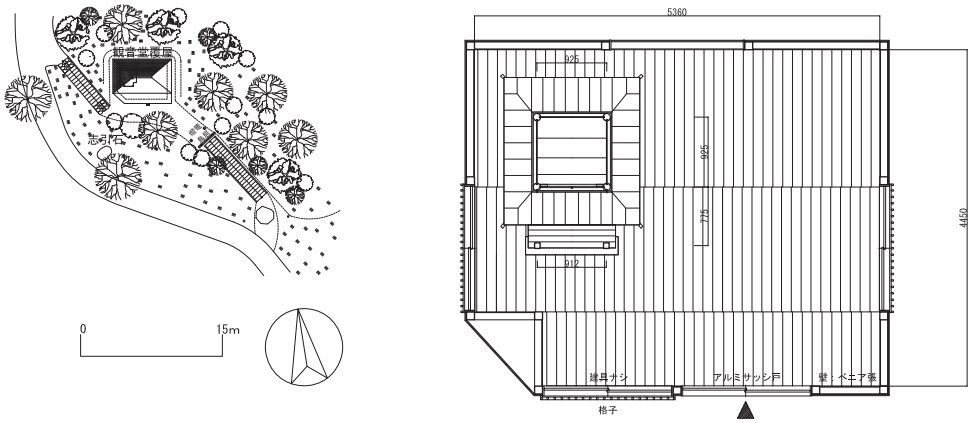


図 21　志引観音堂　配置図・平面図

南正面　向拝部分

水引虹梁蟇股

南東外観

水引虹梁木鼻

手挟

６　宮城郡陸方　留ヶ谷村

⑿ 太子堂　（多賀城市留ヶ谷）

向泉院裏手の道沿いから約 50 m南進した先にＳ家屋敷がある。同家屋敷地は向泉院境内の西隣に位置する。Ｓ家屋敷内の主屋棟の更に南の小高い場所に当該御堂が北東向きに建つ。この堂に関する資料を確認できたのは『多賀城市史第三巻』第四章民間信仰　太子堂の項目のみである。太子堂に関する記事を引用すると

「留ヶ谷の向泉院西隣の屋敷内に一間四面の「太子堂」があり、塩釜方面よりの参詣者が多く、安産を願って供えられている枕を借りる信仰がある。酒屋・水商売・大工などを生業とする者が、商売繁盛を願い、養蚕の豊産も願われた。縁日は三月であるが十八日とも二十八日との詳らかでない。大工の守護神として聖徳太子が信仰される例は広くある。」とある。

また、今回の建物実測調査にあたり、堂内の調査を行ったが、棟札や墨書の類いも発見できなかった。また、本尊の太子像なども堂内にはない。

従って、建築史的所見のみを記す。

御堂は、三尺四方の堂建築であり、四方に切目縁廻らし正面に両開きの桟唐戸を設ける。正面に入側柱から約２尺３寸離れて向拝柱を置き、３段の木階を付す。屋根は、方形造で鉄板葺。一軒の扇垂木。入側の柱は丸柱で、頂部に粽を施し台輪を載せる。尚、この丸柱は床上の外側だけ丸形で、内部は八角柱、床下も八角柱である。この入側柱と向拝柱と床束は全て土台に載り。それぞれの土台は連結されている。斗栱は禅宗様の出組で、軒支輪を備える。中備はない。頭貫木鼻は平面木鼻で明治期以降の繰形意匠様式が施されている。一方、斗栱の実肘木の繰形は、江戸後期の様式と看取される。入側部分と向拝部分には繋梁はなく。向拝柱上部に手挟を置く。向拝部分の意匠は立体的な彫刻を施された部材が多い。水引虹梁木鼻は立体象鼻であり、虹梁の正面は、渦紋がレリーフ状に施されている。手挟も外側には波濤紋をレリーフ状に施している。しかし、虹梁や手挟の裏側には一切、彫刻が施されていない。これら、立体的な彫刻は、江戸末期から明治期の様式のように思われる。虹梁上には中備としての蟇股はない。向拝柱の平三斗斗栱の大斗下には皿斗が挟まれる。

総体的に、江戸後期の様式と江戸末期から明治期の様式とが混在しているが、違和感はなく、瀟洒な一間堂建築であり、保存状況も良い。

北正面外観

北西面外観

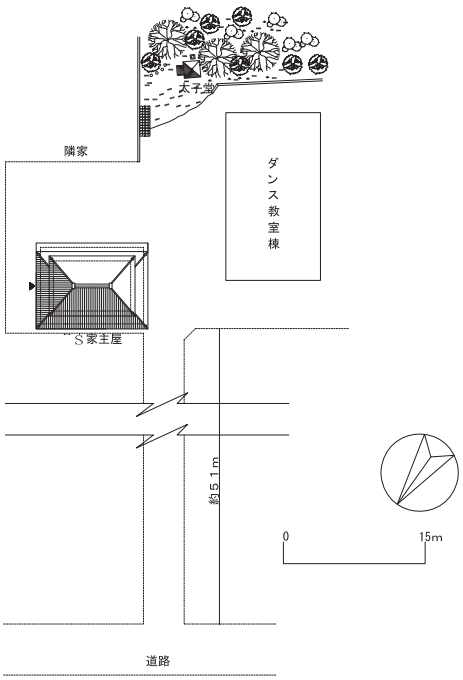
水引虹梁　立体象鼻

水引虹梁　渦紋レリーフ

手 挟

入側柱と斗栱・軒支輪

南西面外観　一軒扇垂木



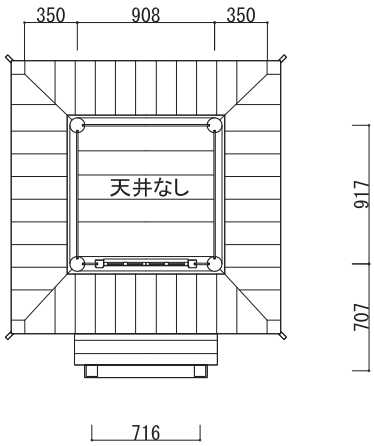
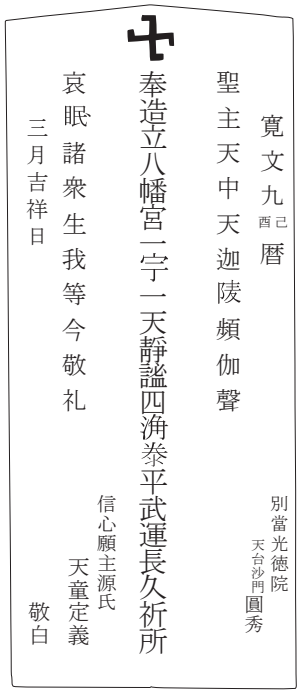


図 22　太子堂　配置図・平面図

Ⅳ　棟札などの造営史料

オモテ



ウラ

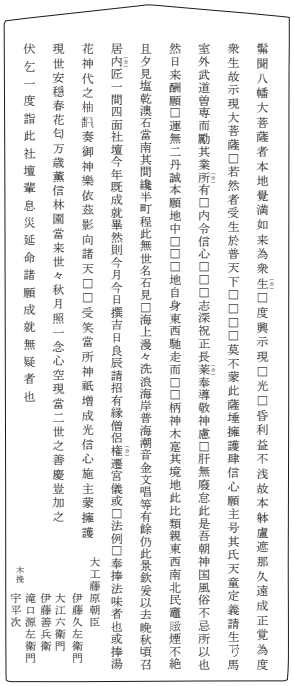
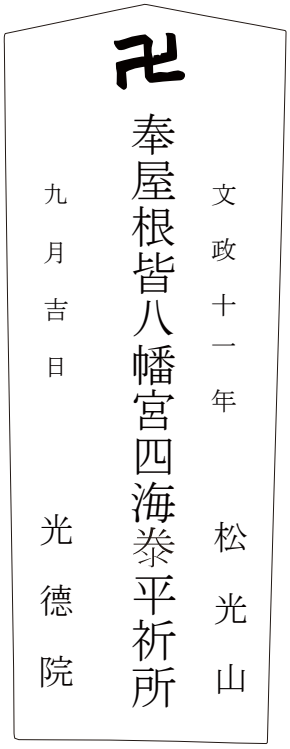


図 23　八幡宮（内八幡）棟札 1　（722 × 303 mm）

オモテ



ウラ

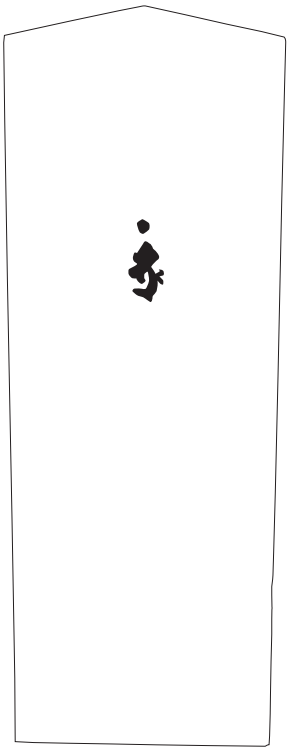


図 24　八幡宮（内八幡）棟札 2　（788 × 303 mm）

オモテ　　ウラ

図 25　八幡宮（内八幡）棟札３

（775 × 234 mm）

オモテ　　ウラ

図 26　八幡宮（内八幡）棟札４

（617 × 161 mm）

オモテ

卍
奉屋根賛八幡宮天下泰平国家全武運長久攸
哀眠諸衆生　我等今敬禮
聖主天中天　迦陵頻伽聲
別當光德院
天台沙門釋信貤
信心大檀主
天童右近之助源頼宣　敬白

ウラ

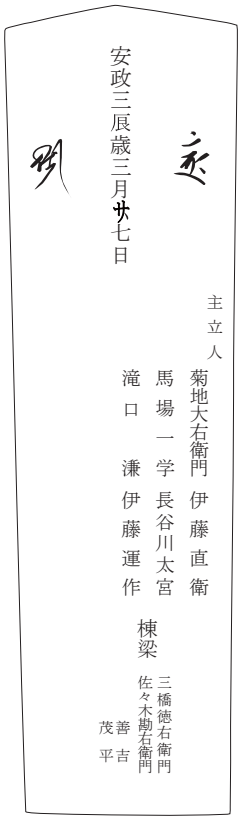


図 27　八幡宮（内八幡）棟札 5　（868 × 248 mm）

オモテ

卍
奉造立喜太郎宮一宇一天静謐四海泰平武運長久祈所
哀眠諸衆生我等今敬禮
聖主天中天迦陵頻伽聲
寛延四辛未天
別當光德院
天台沙門亮専
三月廿八日
信心願主源氏
天童頼根　敬白
大工　仙台新傳馬丁　勘四郎
木挽宮城松之丞　喜惣兵衛
主立　鎌田善兵衛
同　佐藤七兵衛

ウラ

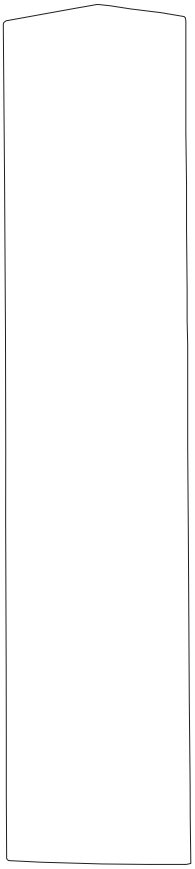


図 28　喜太郎稲荷神社棟札 1　（915 × 193 mm）

オモテ　　ウラ

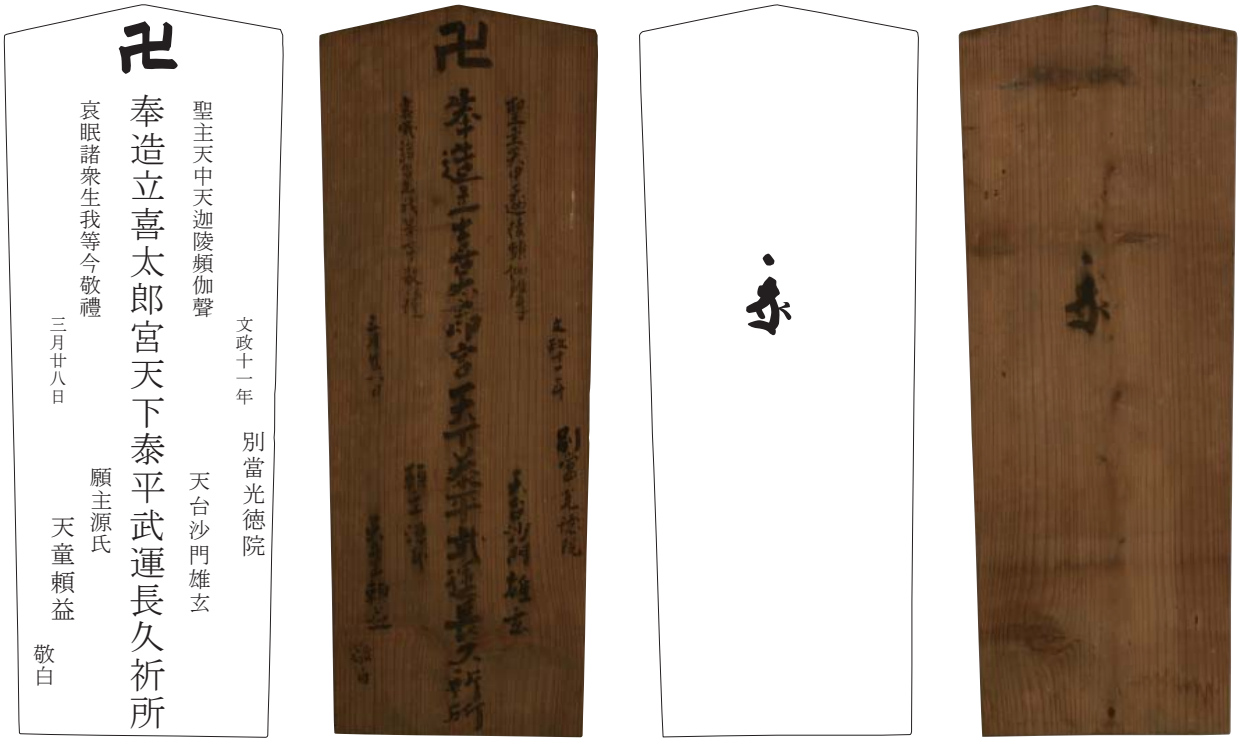


図 29　喜太郎稲荷神社棟札２

（784 × 298 mm）

オモテ　　ウラ

図 30　喜太郎稲荷神社棟札３

（938 × 205 mm）

オモテ

卐

聖主天中天　迦陵頻伽聲　別當光德院　天台沙門釋信貝

奉冊建喜太郎宮屋根賛天下泰平国家安全武運長久攸

信心大檀主　天童右近之助源頼宣　敬白

哀眠諸衆生　我等今敬禮

ウラ

安政三辰歳三月廿七日

主立人

菊地大右衛門　伊藤直衛

馬場　一学　長谷川大宮

滝口　濂　伊藤運作

草苅郡蔵　只野織衛

棟梁　黒田惣治

西村屋栄吉

同　舛屋信治

同　新蔵

新助

図 31　喜太郎稲荷神社棟札 4

（949 × 297 mm）

オモテ

卐

薄伽梵住如来加持廣大金則法界宮大行事周陀羅天　願主別當神奏院宥仙

聖主天中天容顔甚奇妙　今日戒師妙吉祥菩薩　別助成　志賀伊豫掾吉重（社家）

迦陵頻伽聲光明照十方　惣戒師釈迦牟尼如来　惣奉加仙臺中貴賤（并）宮城中衆

奉再興鹽竈宮末社奏者明神宮一宇國家安全所

哀愍衆生者我適曽供養　証誠摩訶梵天王　大工　内藤長右衛門吉久

我等今敬礼復還親近　戒行事普賢菩薩　同　同　長吉　良定

木挽　庄司甚十郎春時

塗師　小川徳兵衛

ウラ

卐

皆貞享四丁卯歳

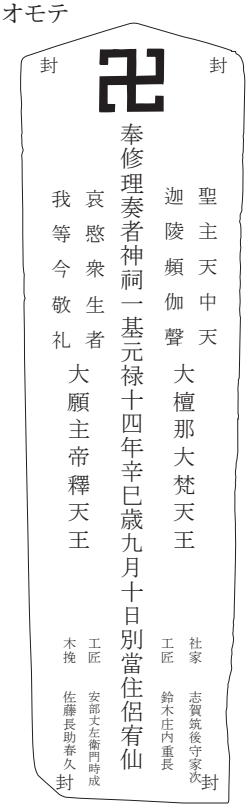
奉法樂理趣三昧導師法蓮寺住持法印照長供僧十二口勤之

六月廿九遷宮日

図 32　陸奥総社宮棟札 1

（887 × 259 mm）

オモテ



ウラ

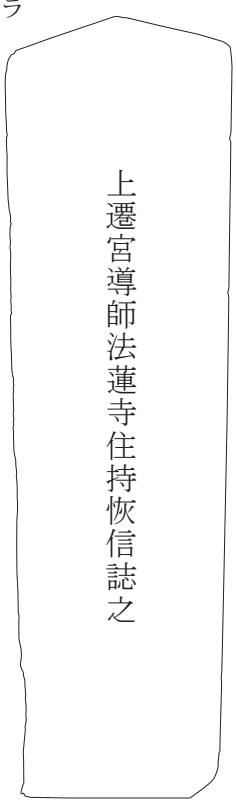
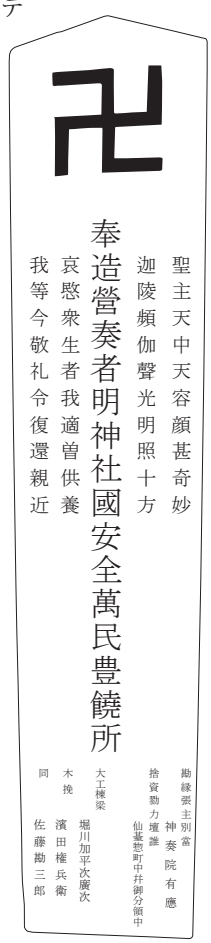


図 33　陸奥総社宮棟札２

（886 × 257 mm）

オモテ



ウラ

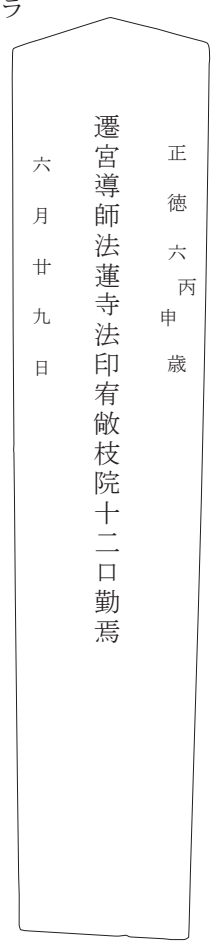
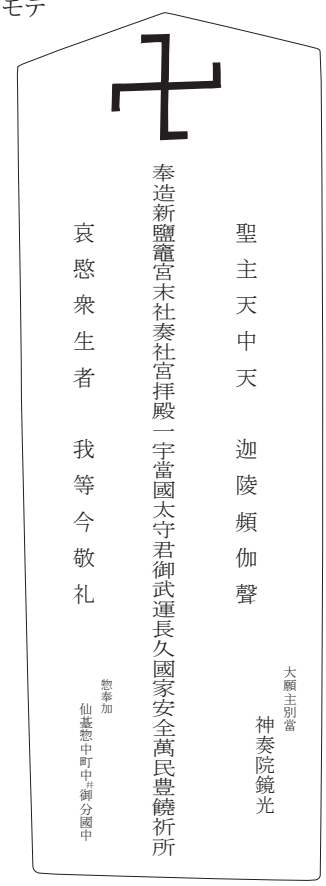


図 34　陸奥総社宮棟札３

（1088 × 232 mm）

オモテ



ウラ

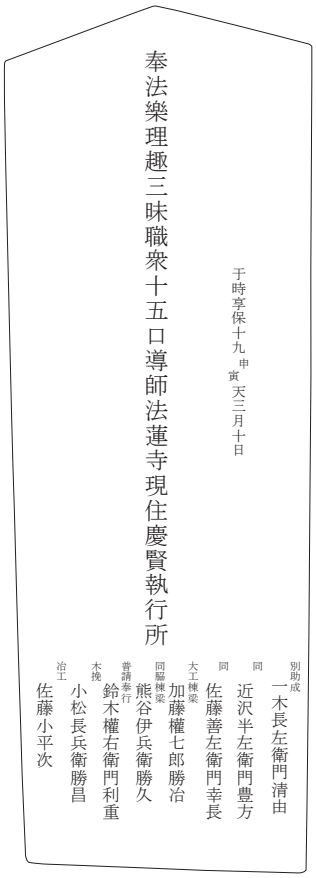


図 35　陸奥総社宮棟札 4　（1056 × 375 mm）

當
御本社御屋根替
再建
干時慶應三卯歳
三月□八日ヨリ□□□
四月廿一日出来相成
棟梁
加藤熊右衛門
伊藤善治
後藤□吉
菅井権□
加藤幸右衛門
□□世話人　肝入　万右衛門
右之通
以上

（計測不可）

図 36　陸奥総社宮棟札５

オモテ

寶暦六丙子歳
遷宮導師神奏院法印慶康勤焉
十二月吉祥日

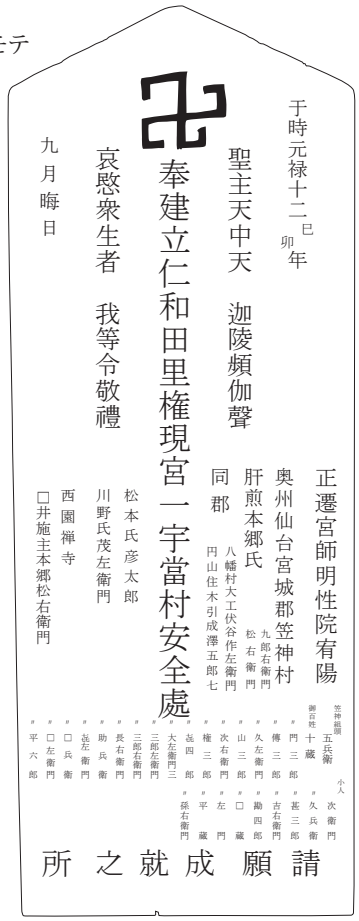
ウラ

聖主天中天迦陵頻伽聲　施主市川村金山屋敷菊地七兵衛
奉造營白山權現宮一宇國家安全萬民豊饒所
哀愍衆生者我等今敬礼
宮大工　勘兵衛
大工棟梁鹽竈住喜惣次永春　八□　與四郎
喜傳次

図 37　貴船神社棟札１

（法量不明・縮尺任意）

オモテ



ウラ

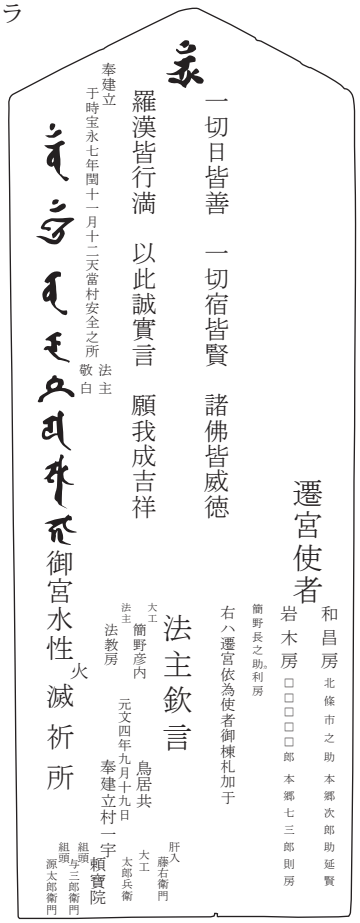


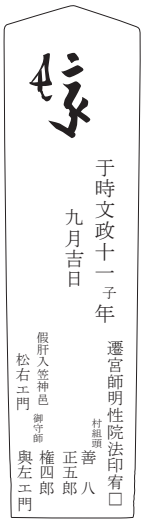
図 38　仁和多利神社棟札 1

（963 × 369 mm）

オモテ

今上皇帝国土安穏
奉萱替御本社 御上屋
村中 安全 御□□足
萬民豊饒如意祈
五穀成就御武運長久

ウラ



于時文政十一 子 年
遷宮師明性院法印宥□
九月吉日
村組頭 善八
正五郎
假肝入笠神邑
松右エ門
御守師 権四郎
與左エ門

（542 × 144 mm）

図 39　仁和多利神社棟札２

多賀城市文化財調査報告書第 135 集

多賀城市の近世社寺建築調査報告書

平成２９年３月発行

編集　東北工業大学ライフデザイン学部
安全安心生活デザイン学科小山研究室
〒 982-8588
宮城県仙台市太白区二ツ沢６番

多賀城市教育委員会

発行　多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

印刷　今野印刷株式会社
〒 984-0011
宮城県仙台市若林区六丁の目西町 2-10

本報告書は、「平成 28 年度　文化庁　文化遺産を活かした地域活性化事業」で作成したものです。